

島根県立石見美術館

研 究 紀 要

第 3 号

2009

島根県立石見美術館

研究紀要 第3号

発行日ー平成21年3月31日

編集発行ー島根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15

TEL 0856-23-2050 FAX 0856-31-1878

印刷ー株式会社タイピック

目次

資料紹介 島根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎日記(第3回) …………… 川西 由里 1

石橋和訓 洋画作品目録 …………… 真住 貴子 42

〈資料紹介〉

島根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎日記 (第3回)

川 西 由 里

明治三十年之記

明治三十年の事を記す

○

明治三十年は余に取て希望ある年なり亦失望せし年なり余は病魔といへる不幸に此年の幾分を送れり余は比較上多く学事に勉めたり歳晩新に一の邸宅を得て所謂宿無しの境より脱し幾分なりとも直接に国税を負担する身となりし故自然将来の基礎も方針の道を得て前途の多望なるに極めて愉快に年を送れり例に依て日記の摘要を録す

明治三十一年一月 大下藤次郎手記

○日記摘要

伊豆修善寺温泉宿新井にありて愉快に屠蘇をくむ (一月一日)

伊豆大平村の旭瀧に写生にゆく (一月二日)

修善寺奥弘法の屈へゆく (一月四日)

修善寺出発吉奈東府屋に投ず (一月七日)

吉奈出発湯ヶ嶋落合楼に投ず (一月八日)

湯ヶ嶋橋写生す午后より天城山中浄蓮の瀧を見る (一月十日)

湯ヶ嶋出発伊東猪戸山田屋に投ず (一月十一日)

新井海岸及手石嶋写生す (一月十四日)

伊東出発熱海山田屋に投ず (一月二十日)

熱海出発夜分帰京す (一月二十一日)

藤村氏と共に橋場に写生す (一月二十三日)

真野氏同伴上野に浮世絵展覧会を見る (一月二十四日)

藤村氏同伴真野氏を訪ふ (一月二十七日)

中丸塾に於ける同源会の新年初会に出席す同源会の幹事に撰る (一月三十日)

墓参にゆく (同日)

藤村氏の加留多会に出席す (一月三十一日)

会話練習のためイーストレーキの家塾へ入学す (二月四日)

明治二十九年十二月上野に開きし水彩画展覧会出品画に対し松井氏より報酬を受く (二月六日) 今日種痘をなす (同日)

巢鴨に写生す (二月七日)

雑司ヶ谷に写生にゆく得る処なし (二月九日)

平井村に写生にゆく得る処なし (二月十三日)

真野氏と共に歌舞伎座に岡崎猫の劇を見る (二月二十日)

巢鴨に雪景を写す (二月二十一日) 種痘感染せず (同日)

同源会に出席す一同写真撮影す (二月二十六日)

日暮里に写生す同伴人中丸氏 (二月二十八日)

- 石田、吉田氏同行関口に写生す（三月三日）
- 石田、藤村氏同行春木座に劇を見る（三月五日）
- 吉田氏同行巢鴨に写生す（三月六日）
- 吉田氏と共に巢鴨に写生す（三月十一日）
- 木村、吉田氏と共に向嶋に写生す（三月十三日）
- 木村氏と巢鴨に写生す（三月十四日）
- 石田氏と共に根岸に写生す（三月十七日）
- 巢鴨に写生す（三月十八日）
- 光徳院に墓参す（三月二十三日） 懐中時計を遺失す（同日）
- 巢鴨に写生にゆく得る処なし（三月二十四日）
- 三河嶋に写生す（三月二十五日）
- 海上氏肖像かき始む（三月三十一日）
- 関口に写生す木村氏同行（四月一日） イストレーキ^マ帰国に付通学を廃す（同日）
- 絵画共進会及孤女院寄附慈善会へゆく（四月五日）
- 武蔵大沢に夏井氏と共に旅行す大松屋に投し不同舎の石川、満谷両氏に逢ふ（四月十二日）
- 夏井氏と共に吉川辺に二枚写生す（四月十三日）
- 夏井氏と共に大沢及越谷に写生し二枚を得、午后夏井氏帰京す（四月十四日）
- 越ヶ谷に写生す（四月十五日）
- 松伏、向畑、及越ヶ谷に三枚写生す（四月十六日）
- 越ヶ谷出發午後帰京す（四月十七日）
- 明治美術会に油絵一枚水彩画十一枚出品す（四月十八日）
- 上野静養軒に於ける明治美術会大会及懇親会に出席す（四月二十五日）
- 日本勧業銀行株式申込をなす（四月二十六日） 原田氏庭を写生（同日）
- 石田氏と共に千駄木に写生す（五月一日） 夜中央会堂に音楽をきく（同日）
- 木村氏と共に関口に写生す（五月二日） 上野展覧会出品の万年橋の水彩画某洋人に売却となる（同日）
- 日暮里に写生す（五月五日） 原田氏庭草花を写す（同日）
- 石田氏と共に千駄木に写生す（五月六日） 石田氏と共に活動写真を撮る（同日）
- 上野音楽学校に奏楽をきく（五月八日）
- 根津に写生す（五月十四日）
- 朝出發北見にゆく河原に写生し国領より布田に到り綿屋へ投ず（五月十七日）
- 布田出發府中及布田に二枚写生し夕方帰京す（五月十八日）
- 久しく朝鮮にありし三宅氏帰朝に付吉田博、渡辺両氏と共に訪問す（五月二十三日）
- 板橋辺写生にゆく得る処なし（五月二十七日）
- 中丸氏方にて婦人裸体を水彩にて写生し始む（五月三十一日）
- モデル写生出来す（六月二日）
- 三宅氏来り一泊さる（六月三日）
- 三宅氏米国渡航に付送別の意をもて松田に会食す（六月十日）
- 長野氏と共に堀切、四ツ木、亀井戸に遠足す（六月十五日）

- 三宅氏出発見送りのため横浜へゆき共に上州屋に一泊す（六月十八日）
- 三宅氏を本船に見送る○横浜松本一泊す（六月十九日）
- 四ツ木吉野園に菖蒲を写す（六月二十三日）
- 親戚高山氏の長女だ子結婚式に臨むため神田金清楼へゆく（六月二十四日）
- 上野音楽学校に琴曲をきく（六月二十六日）
- 真野氏と共に綾瀬辺に写生す（六月二十七日）
- 光徳院に墓参す（六月三十日）
- 中丸氏方へ裸体女子モデルを水彩にて写生にゆく（七月九日十日）
- 裸体モデル写生二枚出来す（七月十一日）
- 上野美術協会には真追善展覧会を見る（七月十四日）
- 藤村、真野氏等と共に上野に各展覧会を見る（七月十七日）
- 朝出發相模葉山にゆき日陰の茶屋に投ず（七月二十三日）
- 一色村に写生す（七月二十四日）
- 葉山出發途中に一枚を写生し秋谷細谷に投ず（七月二十五日）
- 秋谷一枚佐嶋天神嶋一枚写生す（七月二十六日）
- 秋谷街道を写生す（七月二十七日）
- 秋谷海岸を写生す二枚を得たり（七月二十八日）
- 秋谷海岸漁村を写生す（七月二十九日）次て帰京す（同日）
- 朝出發汽車及馬車にて秩父大宮へゆき関根氏を訪ひ一泊す（八月四日）
- 関根氏と共に秩父神社を見同所角屋に転ず（八月五日）
- 大宮の町を写生す（八月八日）
- 大宮出發費川角六に投ず（八月九日）
- 費川出發三峰山に登り神官の家に一泊す○三峰神社を写す（八月十日）
- 三峰山を下り費川角屋に戻る（八月十一日）
- 荒川を写生す（八月十二日）
- 費川旅店を写生す○午后出發大宮角屋に帰る（八月十四日）
- 荒川河原を写生す（八月十五日）
- 関根氏案内にて二十六番及二十八番観音並びに金比羅山にゆく（八月十六日）
- 大宮出發夕方帰京す（八月十七日）
- 前夜ヨリ熱度高く不快なるに医師原田の診察を受くマラリヤ熱なりといふ（八月十九日）
- 熱病平癒せしも脚気を誘発して歩行困難なり（八月二十二日）
- 引続き臥床にありしも稍や快きに初めて散歩す（八月十七日）
- 海上肖像出来し引渡す（八月十八日）
- 角屋主人肖像かき始む（八月十九日）
- 上野音楽学校に外人の音楽演奏をきく（八月二十六日）
- 病牀を撤す（八月二十七日）
- 角屋主人肖像出来引渡す（八月三十日）
- 日光へゆき小西支店へ投ず（八月九日）
- 赤難山を写生す○小林屋支店に転ず（八月十日）
- 七里町及停車場に二枚写生す（八月十一日）
- 日光町を写生す（八月十三日）
- 七里筋違橋を写生す（八月十四日）

杉並木写生す（十月十五日）
 水車場を写生す（十月十六日）
 第二の水車を写生す（十月十七日）
 水車場外の草花を写生す（十月十九日）
 第三水車を写生す午后市街を写す（十月二十日）
 大谷川支流を写生す（十月二十二日）
 中宮祠道馬返しにゆき蔦屋に投ず○午后蔦屋を写生す（十月二十五日）
 剣ヶ峰に写生す（十月二十六日）
 大谷川を写生す（十月二十七日）
 大谷川激流を写生す○午后日光小林屋へ帰る（十月二十八日）
 五重塔を写生す（十月二十九日）
 五百城氏案内にて日光廟を見る（十月三十日）
 東京より真野氏来る（十一月一日）
 真野氏と共に霧降にゆき写生す（十一月二日）
 東照宮門前を写生す○真野氏中禅寺へゆく（十一月三日）
 真野氏と共に裏見に写生す（十一月四日）
 菊の花を写生す（十一月五日）
 真野氏帰京す（十一月六日）
 日光出発夜に入て京に帰る（十一月八日）
 真野、藤村氏等と美術協会、絵画共進会、白馬会等を見る（十一月十四日）
 向嶋に日本中学聯合ボート競漕を見る（同日）
 入間郡原市場村石倉にゆき堀端屋に投ず（十一月十五日）

雨景を写す（十一月十六日）
 赤沢に写生す（十一月十八日）
 石原橋を写生す○同舎の中川氏同宿さる（十一月十九日）
 唐竹橋を写生す（十一月二十日）
 曲竹村に写生す（十一月二十一日）
 赤工橋を写生す（十一月二十二日）
 帰京す（十一月二十三日）
 墓参をなし且亡妹スエ七回忌法会を営む（十一月三十日）
 海上兄君肖像かき始む（十二月六日）
 経済雑誌社に郡書類従の豫約をなす（十二月八日）
 藤村氏手製洋食の饗応に招かる（十二月十四日）
 角屋主人の肖像謝礼として反物一旦来る（十二月十六日）
 神田工藤にて撮影す（十二月二十日）
 石本中主計面会のため横須賀へゆき浪速艦を見三富屋に投ず（十二月二十三日）
 石本氏紹介にて富士艦を見午后帰宅す（十二月二十四日）
 関口駒井町に土地を見にゆく（十二月二十五日）
 海上兄肖像出来に付謝礼を持来る（十二月二十六日）
 関口の地所買受の相談にかかる（十二月二十七日）
 関口の地所談判届き手附金を交付す（十二月二十九日）
 午后出発磯部にゆき林屋に投ず（十二月三十日）
 ○一年の経過
 余は伊豆修善寺の客舎に於て明治三十年の新春を迎えたり余は吾邸

宅を持たず都なる仮りの住居は駒込追分町の浅川方の楼上六畳の一室なり修善寺は一月七日に出発し吉奈、湯ヶ嶋、伊東、熱海を経て同じ月二十一日帰京せり四月迄は近郊の写生をなし二月初めより三月中をイストレーキ家塾に通学せり四月十二日夏井氏と共に武州大澤に旅行し同月十七日帰京す七月二十三日葉山に旅行し同二十九日帰京八月四日秩父へゆき三峰山に登り同月十七日帰京翌日より病を獲て五十日間臥床の中に在り稍快くなりて十月九日日光に旅行し居る事三十日十一月八日帰京同月十五日武西入間川の奥に到り同二十三日帰京せり十二月二十九日小石川区関口駒井町三番地一号宅地八十八坪六合式勺崖地七十一坪一合四勺木造瓦葺平屋建物拾六坪三合三勺を金六百七拾円にて馬場金助より買受の契約を為し野村市太郎立合にて手付金を交附せり同月三十日上州磯部に旅行す明年海軍省にて行ふ遠洋航海に便乗せんと欲し此月稍や運動せり

○起居

一月は旅中なりし故日々の生活不規則なり二月及三月は朝六時半起床天気佳なれば四時頃迄写景のため外出し六時より麴町四番町なるイーストレーキ家塾に通学せし帰宅十時より十一時の間往々其上に遅くなる事あり家に在る時は筆記の修正翻譯等あり日曜土曜には来客及訪問あり此二ヶ月間は殆ど寸暇なく送れり四五月の頃は六時起床英語学にて夜間二時間を裂き他は写景等にて夜は十時に就床せり六月の頃も殆ど同様八、九、十、十一月は旅中若くは病中にて不規則なり但此間英語学には時間を頒てり十二月は七時起床十時就床他は前に同じ

○思想

時に感せし事は心の面影に誌せり爰には只其経過を示さん余は前年来の宿志として此年六七月の頃米国に遊はん事を願へり然るに在米の友より屢々其不利なるを言ひ来り稍や失望して去就に迷ひてある際偶々六月に到て三宅氏渡米の挙あり爰に於て更に心動き三宅氏渡航後の景況に依て方針を定めんと欲し夫等に関する惣ての通信及便宜を氏に托し心窃に其事の成るべきを思ひて準備をなせり然るに爾来の通信は余の志望と違ひ決して其の利益なき事業なるを詳細記して渡米を切止せり爰に及んで余は全く望を失ひ更に考慮するに多少の費用を擲ち虚弱の身を提けて遠く生存競争の激甚なる外国に遊び過分の労働に服し零碎の時間に勉強する方が利益なるか果た又渡航費を全然旅費に供し日本内地名勝を探りて全き時間に勉むる方が利益か孰れか尤も可なるべきを思ひて遂に外国行を断念せり依て更に一事業を起して今斯く繋累なく幸福なる時代の産物を作らさるべからすと再三思考の上思ひ得たるは年々海軍省より派遣する遠洋航海船に乗組て未知の山川風物に接せは随分外国に二三年を送る程の利益あらんとの事なりされど余には夫等の手続きなし成効の有無豫め断じ難し若し成らざらんか余は一年間全国漫遊を為し多少の材料を得広く余に示し然る后明治三十二年の春を期して吾か家庭を作らんと欲す

かくて遠洋航海便乗の事に付運動せしが知人中住氏の紹介を以て石本中主計に会し粗ぼ事の成るべきを慥めたり余の親戚及師なる原田氏並びに凡ての友人は大なる賛成を以て此行を同意せられたり余は又此年末に於て小石川目白台に一の邸宅を得たり同所は関口水

車場の上目白坂の頂にて目白不動に近く西北高く東南開けて眺望極めて佳砲兵工廠の森より麴町九段築土赤城戸山高田の兵陵を望み前に江戸川及神田上水の二流を控え早稲田の田圃は眼下にあり極めて好位置なれば余が三十歳の春を期して此処に画室を作り理想せる娯しきホームを結はんと欲す

余は結婚に付大に心を勞する事あり完全は望むべからざるも稍完全に近き配偶者を得ん事を願ふ余は余より稍位置劣れども其性質及凡ての点において余の理想に副ふべき一少女を知れり余は此少女を以て吾か畢生の友たらしめんと欲す

余は現在全く先考の遺産に依て生活せり然れども余は明年に於ては我が製作物に依て衣食せんと思へり

余は友として三宅氏を信せり同氏の一言一行実余の範とするに足れり而して余は又余の二三の親友よりは幾分の信仰を受け余を以て範とする人もあるなり

余は基督教を信せんと欲すされど未だ幾多の疑あり余は完全なる信者に非ず

以上は明治三十年に於ける余か思想の反影なり

○健康

此欄繁昌の年なり六月六日歯痛を覚ゆ六月七日八日風邪にて苦しむ歯痛及頭痛七月二十九日汽車中にて八月十七日頭痛八月十八日より二十日迄発熱最高四十度二分医師原田に診察を受くマラリヤ性の熱病なりといふ解熱剤急劇なりし故脚気を誘発し起居に不自由を覚え九月中旬迄外出する能はず劇症に非れども此間食パンを以て常食と

なせり十月に入りて稍や近き処は歩行に難からず爾來全く治せず時に依て関節の痛を覚ゆる事あり十月十一日より感冒にかかり二十日頃迄治せず十一月二十日靴磨れを右足中指に求め数日外出する事能はず頗る不自由なりし発熱高かりし故にや此頃に到りて頭部中央の毛髮脱落する事甚し十一月二十四日少しく頭痛を覚ゆ十二月二十九日感冒にかゝり三十日の夜悪寒及頭痛す三十一日稍や愈たり

○読書

新聞紙は時事新報より日刊世界の日本次で読売新聞を首として読み随時他の諸新聞を見たり雑誌にはめざまし艸及美術評論、英語世界を重とし国民の友、英語研究録、外国語学雑誌、新著月刊新小説、太陽、風俗画報、新作文庫、世界ノ日本、大日本、反省雑誌、文芸倶楽部、家庭雑誌、団々珍聞、文学界等

書籍にはひとりね、雪解の水、萬の文反古、かた恋、青ぶどう、菊の濱松、雲の袖、有福詩人、さゝ舟、西洋娘氣質、古今著聞集、今昔物語、大鏡、謡曲通解、つき草、西国立志編、小公子、一葉全集、岡目八もく、豊臣秀吉、小夜嵐、水戸光圀、星月夜鎌倉頭晦録、北条九代記、蕉門頭陀物語、金刀比羅宮嶋道中膝栗毛、江の島道中膝栗毛、木曾道中膝栗毛、奥羽道中膝栗毛、草津温泉道中膝栗毛、東海道中膝栗毛、四十八くせ、古今百馬鹿、酩酊氣質、うきよ床、うきよ風呂、船頭源話、いたこぶし、傾城買談客物語、辰巳婦言、素人狂言紋切形、武者氣質、船頭部屋等

○学事

水彩画の風景写生約八十枚此年中頃よりワットマン六ツ切の形に描く同模写約十枚想像画約十枚人物写生三枚油絵肖像三枚鉛筆其他若干

英語は二月及三月イーストレーキ家塾に通学他は自修せり

作文には伊豆日記、浜の二夜、若葉青葉、野もせの春、三浦の浪、秩父日記、紅葉日記、をさの音等

○経済

大なる収入なく又大なる支出なし画に於て報酬を受けしは金貳拾壹円と反物壱反なり十二月三十一日現在の財産は安田銀行定期預金壱千五百円第三銀行同金壱千円安田銀行当座預金貳百貳拾円東海銀行同金七百六拾円現金貳拾円勸業銀行株券六株払込金參百円関口地所建物買受手付金五拾円貸金凡六百円衣類調度凡金參百五拾円合計金四千八百円也

○親戚の動靜

余の親類と称するもの三余が異母姉なること子は高山権三郎氏に嫁して神田連雀町にあり旅人宿を営業とし二男二女あり長男は高山氏先妻の子にして年二十二放蕩にして家を逐はる次はこと子先夫の子にして年二十一同じく身を治むる能はず家出して大阪にあり長女だいで子年十七この年六月二十四日京橋の時計商榑川頼定に嫁せしが程なく離縁を請ふて現に家にあり次女千代寿年十四相模中野町佐藤某に后来配偶さるべき約束にて養女となり往復常なし家運稍や隆盛前

年未不調和に比して極めて無事なり第二は余の異父兄大下安太郎氏なり本郷真砂町に住して春来浅野家に通勤せしが同年三月改めて雇となり邸内に住ひ同年十二月家従となれり妻くに子の間に長女ふさ次女すゝ三女いと四女きぬ他に市太郎といへる男子の養子あり(私生児引受)ふさ子及市太郎は神田高山氏に業を助け他は家に在りて通学せり生計充分ならざるも寒苦の憂なく衣食足りて后来安心の地位にあり第三は実姉とめ子の配偶者松本市太郎氏なり姉亡せて後は長男明磨のみ余に血縁あり明磨は横浜なる松本家の女婿平田方に養はれ通学中なり未来は軍人たらん志望とか松本氏は岩倉家に雇たりしも十二月解雇され現時無業にて麴町永田町に住せり妻みい子多病にて家庭面白からぬ風説あるも日々の生計に不足なく先々幸福なり

○交際

変らず親密なるは真野紀太郎氏、三宅克己氏にて通信上には福岡にある早川銚太郎氏に米桑港森脇英雄氏なり繼てよく交るは藤村知子多氏石川寅治、中丸精十郎、渡辺審也、石田益敏、木村光太郎、夏井潔、有吉秀太、吉田秋香等の諸氏なり

早崎某、前田某、大束昌可、平子昌、伊藤快彦、田中慶の助、山中舛、加藤教、丹羽林平、和田英作、吉田博、根岸鍊吉、野瀬鶴次郎、大関重義、森林太郎、松井昇、渡辺鋏太郎、大越米吉、中嶋行正等交際せり

新に得し知己は都鳥栄喜(二月)横山軍治(八月)渡辺顕(十一月)松本某(十二月)満谷某(四月)角井厚吉(三月)黒部三記(五月)中川八郎(十一月)関根米助(八月)石本某(十二月)磯野吉雄

(五月) 海上嵐平 (五月) 佐野喜代次 (在米書状にて八月) 奈良某
(七月) 三宅省典 (三月) 長野菊次郎 (五月) 五百城文哉 (十一月)
等他数人あるべし

原田直次郎先生は常に訪問せり病氣前年より幾分かよからぬ様子也
中丸精十郎氏は十一月二十四日一女を得られたりサキ子といふ
三宅克己氏久しく朝鮮の守備たりしが五月解隊帰朝六月十九日米國
紐育へ向け出発同十月ニューヘヴンのエール大学美術学校に入学せ
り

上田丹厓氏とは時々通信せり氏は清国威海衛にあり大森拳太郎、川
鱈林十郎の両氏は交殆ど絶えたり小笠原氏京都に在りて通信あり岡
部昇丸氏も同様なり

○雑事

書籍及諸器具を入れし箱壹個 衣服を入れし箱壹個 十一月三十日
弥生町大下安太郎氏に預く

石碑に座光寺ケンの名義あるを以て削除す (十月初旬)

十一月三十日亡芳智院七回忌の法会を営む

同居人井口源七の送籍をなす (四月二十一日) 岡本某夫妻立会

新に作りし衣服は六月桜井洋服店より薄羅紗背広壹組白チョッキ一
枚七月小松屋洋服店より黒セル上衣一枚縞ズボン一枚十二月秩父縞
綿入一枚五月ケントン洋傘壹本七月フランス皮半靴一足十二月改良
靴一足等也

本年の来客は二百八十八名にして廿九年の三百三十一人に比して四
十三名を減し訪問二百四十六軒にして廿九年の二百七十二軒に比し

て二十七軒を減し来状電報共二百三十三通にして廿九年の二百七十
九通に比して四十六通を減し発信二百九十二通廿九年の四百十二通
に比して百式十通を減せり思ふにかく減少を見しは家庭を失ひたる
と且旅行勝なりしによるならん

三月二十三日夜十時過イーストレーキ家塾より帰途銀側無双十六形
懐中時計赤銅細鎖銀製磁石を遺失せり

明治三十一年乃記

明治三十一年のことを記す

○

明治三十一年余は此年を有望を以て迎へ又迎ふる時よりも猶一層の
有望を以て此年を送りたり此年は余をして遠く五千里外の外国に遊
ばしめ余が豆の如き胆をして此峻酷なる社会に恐るゝものなしとす
る程極めて大ならしめ又余が此長航海と親友三宅氏の欧米巡覽の觀
察談とに依て吾此執れる業が前途極めて有望なるを知ると共に益々
奮て勉強せざるべからざる事も悟り光明なる信仰着実なる理想を持
して如何なる困難如何なる障碍に逢ふも屈する事なく洋々たる前途
一点の光輝を望んで進まんとするなり例に依りて日記を左に摘録す
明治三十二年二月 大下藤次郎手記

○日記摘要

上州磯部温泉宿対岳楼にありて独り屠蘇をくむ (一月一日)

- 磯部小山の上より妙義山を写す（一月二日）
高崎なる大越氏対岳楼にたづね来り一泊さる（一月四日）
磯部出発仮寓所なる駒込浅川へ帰る（一月五日）
弥生町なる兄上と共に神田新声館に人形芝居を見る（一月七日）
関口駒井町三番地の地所建物買取引廻町登記所に於て済す（二月十日）
関口地所建物の事隣家手塚氏に依頼す（二月十三日）
真野氏を訪ひ共に四谷三河屋に一酌す（二月十四日）
杉浦重剛氏に初めて面会す○中丸氏宅にて磯野氏の琵琶をきく（二月十八日）
志賀重昂氏に初めて面会す遠洋航海中の談をきかんとてなり（二月十九日）
藤村氏宅新年会に列す席上小坂、都鳥等諸氏に逢ふ（二月二十日）
青年会館に於ける明治音楽会へゆく（二月二十二日）
松岡寿氏父君の葬式ありて駒込吉祥寺へゆく（二月二十一日）
軍艦を見るの記及び磯部日記脱稿す（二月二十三日）
巢鴨村に雪景を写生す○藤村と共に若竹亭へゆく（二月二十六日）
藤村渡部氏等と共に明治座に劇を見る○此夜池の端千とせに一泊す（二月三十一日）
真野氏渡辺氏と共に若竹亭に小清の浄瑠璃をきく（二月一日）
関口水車場を写生す○関口家屋貴志嘉助氏に貸与す（二月三日）
三河蔦に写生す（二月四日）
大森次久氏並ひに世良田亮氏に面会す（二月六日）
夏井氏と共に若竹亭に小清の浄瑠璃をきく（二月八日）
渡辺藤村氏等と共に橋場に写生す帰途坂本にて夜食を共にす（二月九日）
根岸に雪景を写生す（二月十一日）
松本家に預けありし金庫及衣類を弥生町大下家に預けがへす（二月十三日）
藤村氏画室へモデル人物写生にゆく（二月十四日）
藤村氏画室へ人物モデル写生にゆく（二月十五日）
横浜へゆく（二月十五日）
藤村氏画室にて渡部氏を写す（二月十七日）
横須賀碇泊の金剛鑑へゆく○横浜山の井に水彩画十枚売却す（二月二十一日）
横須賀碇泊軍艦金剛へゆき遠洋航海便乗の許可を得（二月二十三日）
遠洋航海の件に付花房子爵に面会す（二月二十四日）
弥生町大下家へ書籍入箱及夜具一枚を預托す（二月二十六日）
遠洋航海の軍艦便乗は明治美術会の特派員としてゆく筈にて同会評議員会なる神田柳屋に出席す（二月二十七日）
軍艦便乗に付東京府の添書を得横須賀に軍艦金剛を訪ひて呉鎮守府長官に宛てたる願書を出す（三月一日）
遠洋航海に付ドクトル瀨脇の診察をうく（三月八日）
横須賀に軍艦金剛を訪ふ（三月十三日）三宅雄二郎氏を見る（同日）
遠洋航海に付駒込草津に於て余のための送別会ありて出席す（三月十三日）明治美術会に水彩画四十枚出品す（同日）
原田先生方にて航海送別の宴を賜はる（三月十四日）
駒込浅川を引払ひ荷物一切弥生町大下家に預け神田高山氏に移る○

此夜人々を招きて別盃をくむ (三月十五日)

正午高山氏方出発横須賀に軍艦金剛を訪ひ同地三富屋に一泊す (三月十六日)

軍艦金剛に乗艦し正午横須賀を發し濠洲に向ふ (三月十六日)

艦中にて感冒にかゝり服薬す (三月二十五日) 艦橋を写生す

感冒治し服薬を廢す (三月二十六日) 士官室を写生す

吾艦は此日午前六時北緯二十三度半を経て熱帯に入る (四月四日)

艦は午前五時約北緯九度十六分の地に於て太陽直下を通過す (四月十三日)

雪花菜に中毒して大に吐く士官の多くも皆同じ (四月十五日)

横須賀出発以來初めて陸地を見る西班牙の領にしてポネピーといふ

(四月十七日)

ハッチより下りんとして足を外し肩をいたむ直に治す (四月十九日)

上甲板より艦橋を写生し今日漸く成る (四月二十二日)

赤道祭あり臨時に事業を休み種々余興あり (四月二十七日)

午前一時艦は赤道直下を通過す (四月二十九日)

チナクラ山及びサンタクロス嶋を見る (五月七日)

上甲板を写生し始む (五月八日)

海上遙かに帆走船を見る横須賀出帆以來初めての發見なり (五月十日)

上甲板の写生成る下甲板を写生す (五月十一日)

正午南緯二十三度半を越へ温帯に入る (五月二十二日)

夜来暴風艦は荒天準備を為す (五月二十五日)

朝濠洲の地を遙かに見る (五月二十七日)

午前艦は濠洲プリズバン沖に碇泊す○午后士官数名と共に上陸汽車によりてプリズバン市に到りグランドホテルに投宿す (五月二十八日)

午後本艦に帰る (五月二十九日)

午前小蒸気によりてプリズバン市に上陸市中を巡覽す (五月三十日)

艦はプリズバンを出發しシドニーに向ふ (六月三日)

艦は午前シドニー港に碇泊す○夜分上陸市中を見る (六月六日)

上陸して博物館を見る (六月七日)

上陸博物館及動物園を見る (六月九日)

上陸植物園及農工博物館を見る (六月十日)

上陸美術館を見る○シドニーの紳士ブルームヒールド氏に面会す○

ヒールド氏に伴はれてハア・マゼスチー座に劇を見る (六月十一日)

サーキラーヒーを写生す

上陸ドクトルオニユル氏の招待にて茶話会にゆき音楽会をきく (六月十二日)

月十二日)

上陸日本領事館へゆく (六月十三日)

上陸エキスチェンジに写真を撮る○美術館を見る○シドニー病院を

見る (六月十四日) 此朝国会議事堂を見る

上陸ブルーム・ヒールド氏の紹介にて画家トム・ロバート氏に面会す○凍肉製造処を見る○ブルーム・ヒールド氏の招きにて同氏宅に

晚餐の饗応をうく○同氏家族の人々に面会す (六月十五日)

伊国領事マラーノ氏及び同夫人に面会す (六月十六日)

上陸トム・ロバート氏に面会し互の作画を交換す○オニユル氏の案内にてシドニー大学校を見る (六月十七日)

上陸シドニー・タウンホールに於ける音楽会に臨む（六月十八日）
在留日本人の催にかゝる金剛士官招待会の招きに応じ小蒸汽船にて
港内巡遊を為す○此夜ブルームヒールド氏へ告別にゆく（六月十九
日）
艦は午前シドニー港を発しメルボルンに向ふ（六月二十三日）
逆風にて艦の進行鈍く不得止ウォーターローに仮泊す（六月二十六
日）
艦はウォーターローを出発す（六月二十七日）
艦は午后メルボルン沖に碇泊す○夜二三の将校と共に上陸汽車によ
りてカンニングハム氏の宅にゆき晚餐し通船なきたためメルボルン市
に帰りてメンジスホテルに投宿す（六月二十八日）
ホテルを出で動物園博物館美術館等を見帰艦す（六月二十九日）此
夜艦長以下数氏と共にメルボルン市にオペラを見る
上陸国会議事堂及水族館美術館を見る（六月三十日）
メルボルンの紳士ニューピキン氏の招きにて其宅へゆき盛宴に列す
同氏の子女にも紹介さる（七月一日）
上陸美術館へゆく○ウキルキンソン氏に面会す（七月二日）
軍医長と共に動物園へゆく（七月三日）
上陸公園地に遊び蟻細工を見る（七月四日）
艦にはメルボルン紳士の招待宴会あり演劇作り物其他余興極めて多
し（七月五日）
上陸メルボルン税関を見る○教授イルキントン氏の案内にてメルボ
ルン大学を見る（七月六日）
艦の副長松居中佐病氣にて入院する事となり今夜上陸一人此地に止

まる（七月八日）
艦は午前八時メルボルン港を出発しフキジー叢嶋スバ港に向ふ（七
月九日）
頭痛及び悪寒を覚ゆ（七月十六日）
頭の痛みしは歯痛のためにて片頬大に腫る（七月十八日）
頬の腫れを切断し神気頓に旧に復す（七月二十日）
頃日暴風にして艦の傾斜尤も甚し（七月二十一日より二十五日頃迄）
午前二時艦は界気線を越へて熱帯に入る（七月二十九日）
午后フキジー叢嶋中のカンダヴ嶋を見る（七月三十日）
午前フキジー スバ港外に艦は錨を投ぜり（七月三十一日）
午后上陸してスバ港内を散歩し旧酋長の家にゆく（八月一日）
夜分上陸サモア人の洗濯屋にて土人の舞踏を見る（八月三日）
上陸水雷長と共に洗濯屋にゆき写真す（八月四日）
上陸港外の田舎を見る（八月五日）
此地の紳士招待のため艦には種々なる催あり（八月六日）
艦は午后一時スバ港を抜錨し横須賀に向ふ（八月七日）
午前七時艦は赤道直下を通過せり（八月二十二日）
午前十一時北緯五度の地にてストロング嶋を認む（八月二十六日）
午後十一時艦は北緯九度三十六分に於て太陽直下を通過す（八月二
十八日）
午前十一時八丈嶋を望む次て三宅嶋小嶋神嶋等を見夕方遙かに富士
山頂を見る（九月十五日）
午前八時艦は無事横須賀港に帰着す○此夜艦長の招きにて田戸小松
屋の宴に列し同町に一泊す（九月十六日）

小松を去り神田高山氏方に投ず（九月十七日）
 出発の際労を執りし人々を招きて酒を酌む（九月十九日）
 待乳園に写真を撮る（九月二十日）
 原田先生東京を去て神奈川在子安に在るを訪問す（九月二十二日）
 千代寿と共に白梅亭へゆく（九月二十三日）
 感冒にして少しく頭痛す（九月二十六日）
 小川亭に浄瑠璃をきく（九月二十七日）
 品川に軍艦金剛を訪問し一泊す（十月一日）
 永瀬機関小監及高山娘二人と共に明治座に劇を見る（十月三日）
 東京出発箱根宮ノ下龍雲館に投宿す（十月四日）
 濠洲航海中の画を仕上始む（十月六日）あけぼの日記を書き始む
 浴室の写生をなす（十月七日）
 浴室の図成る（十月十五日）小涌谷辺を散歩す○痔を患ふ
 早川の写生をなし始む（十月十六日）
 早川の写生成る○宮城野辺散歩す（十月十八日）
 木の葉かくれの瀧を写生す（十月十九日）
 のこぎり竹を写生す（十月二十二日）
 芦の湯、元箱根、箱根神社より湖水を渡り湖尻に上陸し姥子、大地
 獄、強羅等を経て諸所巡覧す（十月二十三日）
 箱根出発弥生町大下家に投ず（十月二十四日）
 弥生町出発上野坂本駅薦の屋に投ず（十月二十七日）
 坂本市街を写生す（十月二十八日）明治美術会の水彩画引取る
 坂本宿外れを写生す（十月二十九日）
 三宅氏帰朝出京の報ありて坂本出発弥生町へ帰る（十月三十日）

弥生町を去り神田高山氏に投ず（十月三十一日）
 初めて丸山健策氏に逢ふ○三宅氏に久々にて面会す○前歯に黄金を
 顛充す（十一月一日）
 神田姉及娘二人と共に歌舞伎座に劇を見る（十一月五日）
 高山氏を引払ひ弥生町に移る○真野氏を訪ひ一泊す（十一月六日）
 石川氏と弥生亭に会食し湯嶋天神社内共同椅子にて語る（十一月
 九日）
 日本橋丸善書店にサロン及ノート・イン・ジャパンを注文す（十一
 月十日）
 子安村に原田先生を訪ひ一泊す（十一月十一日）
 千代寿と共に上野精養軒に昼食し音楽学校に明治音楽会の演奏をき
 く（十一月十二日）
 東京出発東海道興津水口屋に投ず（十一月十三日）
 興津海岸有渡山を望むの図を写す（十一月十五日）清見寺を見る
 （同日）
 前日の写生を続く○芳川格氏に初めて面会す（十一月十六日）
 松並木を写生す（十一月十七日）
 雨中の海を写生す（十一月十八日）
 富士山頭を写生す（十一月十九日）
 富士山頭の写生成る（十一月二十日）
 興津町裏を写生す○山上に登りて味柑畑を見る（十一月二十一日）
 興津町裏を写し終る○興津山の写生をなす（十一月二十四日）
 興津町裏の写生全く終る○はこね艸脱稿す（十一月二十六日）
 宿の主人と共に倉沢望嶽亭へゆき薩陞峠を上り一日遊ぶ（十一月二

十七日)

興津河原に富士を写生す○午后海岸を写す(十一月二十八日)

江尻に沢地氏に面会す○龍華寺及鉄舟寺を見る(十一月二十九日)

興津を発し清水在駒越万象寺に投す(十二月四日)

海岸の畑を写生す○竹市氏と共に久能山に上る(十二月七日)

三保へゆき松原を見写生す(十二月十日)

田甫の富士写生し始む○竹林写生し始む(十二月十一日)

田甫の富士成る(十二月十四日)

興津へゆき芳川氏に逢ふ(十二月十六日)

墓地の写生を始む○東京より真野氏来り共に久能山へゆく(十二月十七日)

十七日)

墓地の写生をなす○竹林の写生をなす(十二月十八日)

墓地の写生を終る○竹林の写生成る(十二月十九日)

清水町へゆく(十二月二十二日)

万象寺庫裏を写生す(十二月二十四日)

暁の富士写生し始む○庫裏の写生をなす(十二月二十五日)

清水座に劇を見る○興津に遊ぶ(十二月二十六日)

庫裏を写生す(十二月二十九日)

松原を写生す○庫裏を写生す(十二月三十日)

庫裏を写生す(十二月三十一日)

○経過

住居は前年と同じく駒込追分町の浅川楼上の小室なり一月元旦は上州磯部の客舎に迎へ同五日帰京濠洲航海の軍艦便乗の事に多く奔走

し其間時に近郊の写景を為し三月十七日軍艦金剛に便乗して五月二十八日濠洲プリズバンに着し六月三日同所出発同六日シドニーに着し知己数氏を得六月二十三日シドニーを発し同二十八日メルボルンに着し爰にも二三の知己を得七月九日メルボルンを発し同三十一日フキジースバ港着八月七日同所を発し九月十六日無事横須賀に帰着し爾来神田高山氏に居る事数十日十月四日箱根へ保養旅行を為し同二十四日帰京弥生町大下氏に在り同二十七日上毛坂本に旅行し同三十日帰京神田高山氏或は弥生町大下氏に在り十一月十三日東海道興津に旅行し十二月四日有渡の浜万象寺に転じ同所に於て年を送れり

○起居

軍艦便乗のことに奔走せし間は殆ど終日此事のみ弥よ許可を得て後も其準備に忙しく日々の起床就床等にも定まりし時なし艦に乗組て後は艦内の規律に順ひて極めて秩序よく生活せり帰朝後は殆ど旅行中とて定まりし事なく只日々絵を画き文を作り書を読むのみ

○思想

心の面影は我偶感を説明すべし年の始めにあつては我は只軍艦便乗の成らん事を願へるのみさて乗艦後は海軍部内の事にて種々の感を起せし事少なからず其外国の市に到るや物質的の進歩に驚くと共に更に幾多の感想を生ぜり外人の家庭に入つては其美に感じ美術館を見ては其精巧に驚き憤発心は弥よ盛んとなり我胆は極めて大になれり次て十一月親友三宅氏に逢ふや氏が欧米に於ける実験談は余の意志をして弥よ堅固ならしめ爰に希望を生ぜり余は前年に於て此年よ

り先考の遺産によらず自活すべく決心したりしが今此鈍き手腕を以て生活と戦ひ旁ら研究せん事は極めて困難にして将来の成功是か為めに危からんに幸に猶聊か餘財ありて数年の間は一錢の収入なく共学費を得べきにより方針を変じて猶一層深く研究し余か技術上の基礎を堅固になし置かん事に決せり余は又家の必要を深く感じたり其旅行先より帰京するや家なき余は徒に東家西邸に轉輾し持返りし荷物も解くに処なく画き来りし絵も開き見る事能はず所有の書籍参考品も何処の荷物に蔵められしや是を求めんには一日を空ふせざるべからず如斯有様にては常に貴重の時間を失ふのみにて不便不都合に苦しめられ到底愉快に勉強なし得べきに非ず依りて明春を期して我が家を新築せんと決せり偕次には弥よ家を作るとせば妻君を娶らざるべからず修業時代に妻を要せずとは余も前年来思ひ居りし処なるがそは双親等あるもの、場合にて余の如き単独の者には是非家を治むるの人を要するは論を待たず且又余が修業の方針従前と異なるを以て妻君其人は決して余の足手纏ひにあらざればなり而して此妻君に付ては余の数年来心を苦しむ処余には一人の理想に近き婦人あれど元より縁約なしあるに非れば果して円満に成就すべきか否は疑問なりとす

○健康

初めて大洋を船に乗りて船暈を感じる事数回船中にて雪花菜に中てられ吐きし事一回船中にての感冒二回口中の腫れし事二回箱根にて痔疾にかゝり二三回出血ありしが程なく治したり脚気は前年患ひし事故再発を期せしが幸ひに此事なかりし前歯の漸々腐蝕するにより

此年十一月黄金を贖充せり体重は四月十七日十四貫九百六十目五月十六日十五貫二百七十目六月十七日十五貫二百二十目七月十七日十五貫八月十八日十四貫八百二十目九月十四日十四貫六百二十目あり何れも航海中艦内にて量りしものなり惣して此年は身体稍や健に血色も佳頭痛等も少なく頗る愉快なり

○読書

新聞紙は読売新聞を首とし時事新報、万朝報、中央新聞、毎日新聞、報知新聞、朝日新聞、都新聞等を見雜誌はめさまし艸、美術評論は絶えず購読し福音新報、帝國文学、反省雜誌、世事画報、新小説、文芸倶楽部、新著月刊、太陽、英語世界、天地人、花の園生、世界の日本等、読書にはスケッチブック、逸話文庫、栄花物語、名家紀行文選、西国立志編、礼氏絵事弁、傾城買談客物語、大鏡、川及沼沢、旧幕府、八水随筆、俗耳鼓吹、后は昔物語、用捨箱、白石小品、幕朝故事談、登高自卑、妙々奇談、内安録、四人の人、劇場新話、未来の旅行、神の子基督、近代世事考、斯文源流、松屋叢書、浅間縁、面かげ艸紙、正本製、基督の真相、史観的基督教、マルチノー氏一語千金、理想の教会、文字摺昔人形、南洋時事、濠洲紀行、瀬田の橋龍女の本池、阿波の鳴門物語、風来六々部集、評判の俵、はこねくさ、エマルソン氏一語千金、近代の■経批評、多情多恨、与謝蕪村、窓のすさび、東海道名所記、異本洞房語園、日高川考、老のたのしみ、瀬田問答、賤のをだまき、近世畸人伝、金色夜叉、柳荒美談、ひげ男、英文学講義録、水泡集、三国志、真田三代記、福翁百話、ひなさだめ、国定忠治、鼠小僧、キャピテンクーク、種彦

傑作集、珍本全集

○学事

水彩画にて人物及風景を描きしもの約三十七枚他に濠洲航海中のスケッチ百枚程あり油絵には一度も筆を取らず

作文には磯部日記、あけぼの日記、わあどるゝむ物語、はこね艸あり

○経済

例に依て収入といふて目立ちしものなし水彩画を売却して金貳拾七円を得たるのみ支出に於ては関口地所建物購入残金に六百五拾円程濠洲航海の軍艦便乗に惣てにて金六百円を真野氏へ金五拾円を用立しのみ十二月三十一日現在の財産は日本勧業銀行株六株払込金三百円安田銀行定期預金貳千円同小口当座預金参百貳十円充分返済さるべき見込ある貸金百五拾円関口地所建物壹千円衣類及調度書籍にて金五百円合計四千貳百七拾円也

○親戚

高山家は猶神田にありて業務弥よ盛大に積徳会及び信用会の事業益々挙り遂に信用銀行を創立してそが頭取たり姉上もあまり苦情なし男の二児は家にあらず長女だいで子元の如く次女千代寿は中野佐藤の縁を切りて家に在り弥生町なる大下家は邸内の気極めてよく七月には増給あり家内は前年と異なる事なく無事なり松本家は春來再び岩倉家の雇となりしが十二月に到り大崎村池田侯爵家の雇となり年末そ

が邸内に移轉せり横浜に於ける同家の一族は極めて無事なりといふ

○交友

十月三宅氏欧米を巡覽して歸り來り爾來交一層密を加ふ氏は余の生きたる模範にして余の信仰する人なり余は此人に依て益を受くる事決して少々ならず真野氏とは不相変なり只例に依て家事に其日を忙殺せられ研究を重しとせられざるは遺憾なり石川氏は余が真面目の友都に在て余が心事を語る者以上の三氏に過ぎず福岡に於ける早川氏桑港に在る森脇氏共に通信を欠かず中丸、石田、藤村、木村、有吉、吉田、伊藤、小笠原、渡部、渡辺、長野、夏井、中川、山中等の諸氏とも交際を持続せり

原田先生は例の病氣漸々悪しく八月下旬本郷の地を去て神奈川在子安村に移転せられたり

三宅省吾、磯野、角井、五百城、都鳥等の諸氏も交際せり

新に交を結びしは世良田亮(二月) 大森次久(二月) 杉浦重剛(二月) 志賀重昂(二月) 三宅雄次郎(二月) 梨羽時起、松居銓太郎、服部雄吉、石井義太郎、笠間直、名和又八郎、永瀬狷次郎、佐竹達、河野虎衛、吉沢陸三郎、森駿藏、渡辺真吾、八戸三輪次郎、増井敬次郎、中川平八、湯浅竹次郎、加賀新太郎、犬塚助次郎、鈴木為重、松岡静雄、三宅大太郎、堀田英夫、山梨勝之進、宮沢民三郎、今泉哲太郎、四竈考輔(以上軍艦内にて) 永井延次郎(十一月) 芳川格(十一月) 等なり

○雑事

明治美術会の創立十年記念春期展覧会へ水彩画四十枚出品せり新に作りし衣類調度には黒メルトンフロックコート壺組、黒オーバーコート壺枚アルハカ夏セビロ壺枚薄羅紗夏ズボン壺枚黒山高帽壺個秩父縞袷せ壺枚同綿入羽織壺枚フランクセット白二枚統き壺枚赤皮上靴壺足古金手鈕壺組九金時計鎖壺個金鉛筆壺個トッパス入金ピン壺個サフヤ入金指輪壺個銀葉味入壺個写真帳壺個黒塗筆筒壺棹等なり
 来客は二百壺名にして前年より八十七名減し訪問は百三十九戸にして前年より百七軒減し来状は内外電報共二百二十五通にして前年より八通を減し発信は二百五十一通にして前年より四十壺通を減ぜりかく惣てに減少を見しは半年の久しき海に浮かびてありしと帰朝后も絶へず旅行のみせしを以てならん

明治三十二年の記

明治三十二年のことを記す

○

明治三十二年は極めて多事なりき余は此年に於て豫て計画せる如く新に家を造り新に妻を迎へたり此年の前半はかく慶事を以て過ぎれしが後半秋に到りて唯一の姉を亡ひ年末又唯一の師を亡ひたりされど此年は余に一層の勇氣と希望とを与へ余か家を有し妻を帯するによりて猶一倍の憤発心を起さしめたり余は種々なる障碍の爲めに勉強の時少なかりしも吾が芸術は一枚は一枚より進歩して前途の成功

稍や見る事を得べく又吾が家庭は極めて平和にして且愉快に一点の苦痛を止めず幸福限りなし只少しく心頭に在て寒心にたえざるは今後三五年の後に於ける吾等の生活なり目下の急にはあらねど研究又研究よし業は進むも世に顧られざるの事あらんか其時には今の安樂を奪はるゝ事もやと恐るゝなり希くは此懼をして杞人の憂たらしめよ

明治三十三年一月 大下藤次郎手記

○日記摘要

駿河国清水港駒越舎暉亭にて新年を迎ふ東窓を開けば富嶽を見るべき温暖にして風景佳絶の地なり(一月一日)

昨年より写生しかけし富士の朝色を描く午后よりは万象寺の勝手元を写す(一月二日)

万象寺勝手元を写す(一月四日)

福岡の友人早川銈太郎氏吾が寓所に來る数年逢ひ見ず快談夜を徹す(二月五日)

早川氏と共に三保の松原へゆき午後龍華寺及觀音堂の山にゆき夫より興津清見寺を見水口屋に会飲し静岡にて袂を別つ世は静岡■陽館に一泊す(一月六日)

華陽院に齊藤氏を誘い次に石田氏を訪ひ石田氏と共に臨濟寺、浅間社及び丸子吐月峯にゆき石田氏方に一泊す(一月七日)

石田氏を伴ひ万象寺へ歸り共に海岸を写生し一枚を得たり石田氏万象寺に宿泊す(一月八日)

万象寺を去り石田氏と共に江尻へゆき鹿嶋屋に一泊す(二月九日)

- 江尻出発駒越へ帰る（一月十日）
朝松原の富士を写し午後門前の松を写す（一月十七日）
門前の松を写す（一月十八日）
富士の朝景色仕上く（一月十九日）
午前由比正法寺に石田氏を訪ひ共に江尻に到り鹿嶋屋に一泊す（一月二十一日）
江尻を去り石田氏と共に駒越へ帰り田甫より富士を写す（一月二十二日）
午後石田氏由比へ帰る○午後三宅氏来る画談にて時の過るを覚へず
三宅氏は当分同宿する旨なり（一月二十四日）
三宅氏と共に写生に出て有渡山を写す変調にて極めて困難なり（一月二十五日）
有渡山及門前の松を写す（一月二十六日）
有渡山及門前の松成る（一月二十七日）
門内の六地藏堂を写生す（一月二十八日）
門内の六地藏堂を写生し成る（一月三十日）
后ろ山の杉を写生す（一月三十一日）
後ろ山の杉を仕上る（二月一日）
海岸の松を写生す（二月二日）
海岸の松の図成る（二月三日）
田甫の富士を写し成る○三宅氏清水へゆき種々なる買物あり人々階上に集まって一大会食を為す（二月四日）
みづゑ会設立の相談を為す○午後三宅氏田比へ向け出発す（二月五日）
午前万象寺出発江尻より汽車に乗り夜八時帰京弥生町大下氏に投ず（二月八日）
大下兄と共に大崎村に松本兄を訪問す（二月十一日）
午后上野梅川楼に於ける高山兄の還暦祝に会す出席者百余人皆積徳会信用会等の人々なり種々の余興あり午後十時散会す（二月十二日）
本郷区根津須賀町二十七番地青柳へ下宿す八畳の部屋なり（二月十三日）
感冒に罹り咳出て困しむ（二月十六日）
関口駒井町建築の相談を為す（二月十八日）三宅氏由比より帰り来り一泊す種種快談あり（同日）
青柳庭前の梅花を写し始む極めて叮嚀の者なり（二月二十日）
午後梅を写す（二月二十一日）
午後庭前の雑木を写す（二月二十二日）
庭前の梅を写す（二月二十五日）
庭前の梅仕上る雑木を写す（二月二十七日）
坂本紀行夜寒の風成る（三月一日）
駒井町建物起工す（三月三日）大下家に招かれ白酒の馳走あり（同日）
中丸氏と共に谷中美術院にて川村清雄氏の展覧会を見る○夜真野と共に渡辺氏を訪ひ余の住所を四谷に転ずる事に相談す（三月五日）
同夜真野に一泊す（同日）
弥生町より馬車にて芳川氏を訪ふ氏の病よからず（三月六日）
午後庭園の写生を為す（三月七日）
午後より四谷伝馬町一丁目三十七番地宮嶋方に移る青柳に於いて

業の話をき、しゆへなり伝馬町は友人渡辺氏の居所に近し(三月九日)

大崎村松本氏を訪ふ(三月十三日)

神奈川在子安村に原田先生を訪問す(三月十四日)

真野氏の庭を写生しはじむ(三月十五日)

三宅氏の写せし海の図模写す(三月十六日)

真野氏の庭を写す(三月十七日)

明治美術会へ水彩画二面出品す猶多く所持せしも三宅氏の勧誘により出品を見合せたり○此夜真野氏と共に溜池白馬会研究会に黒田氏の講義をきく(三月十八日)

水彩画会の事に付三宅氏と共に上野公園内高橋氏を訪ふ(三月十九日)

海の図を模写す(三月二十日) 少しく頬腫る(同日)

真野氏へゆき庭を写す○天神の梅を写す(三月二十一日)

真野氏へゆき天神の梅を写す午後より庭を写す成る(三月二十二日)

天神の森の梅仕上げ午後より大久保の田甫を写す(三月二十三日)

朝戸山の田甫を写し午後大久保の田甫を仕上く○駒井町建築上棟式

あり真野と共にゆき帰途蓬葉亭に会食す(三月二十五日)

三宅氏来り一泊さる(三月二十六日)

戸山の写生を為す○渡辺方にて宮嶋ドーターに付縁談あり(三月二十七日)

宮嶋母より直接縁談の話あり(三月二十八日)

大久保裏戸山の写生出来午後諏訪の森を写す(三月二十九日)

朝暮参す○父上七回忌法事は高山と相談の上明日に決せしなり(三

月三十日)

父上七回忌法会を光徳院に営む○神田姉宮嶋へ立ちよりドーターを見る(三月三十一日)

三宅氏母人来り三宅氏身上に付種々依頼さる(四月一日)

真野氏庭の椿を写す午後諏訪の森成る○此夜宮嶋親戚秋山及村井に面会縁談の打合を為す(四月二日)

三宅氏来り一泊さる(四月四日)

丸山氏来り快談す(四月五日)

弥よ宮嶋家の長子春子を娶る事となり結納を交す媒酌人は真野氏及渡辺氏なり(四月八日)

春子と共に上野へゆき夫より植物園を巡覽し駒井町新宅に立より帰る(四月九日)

春子及弟文雄並びに真野氏を誘ひ新富座に少年劇を見る夜は松田に食事す(四月十二日)

午前四谷伝馬町宮嶋方に於て春子と結婚の式を挙げ午後より親類を招きて披露を為し四時の汽車にて春子と共に鎌倉へゆき材木座光明館へ投す(四月十四日)

春子と共に長谷大仏由井ヶ浜辺を散歩す(四月十五日)

春子と共に鶴ヶ岡鎌倉ノ宮附近並びに寿福寺、建長寺飯繩神社等へゆく(四月十六日)

江ノ嶋へゆきゑび屋に昼食す(四月十八日)

鎌倉出発横須賀へゆき三富屋に投す(四月十九日)

朝松居氏を訪ひ午後春子と共に富士鑑へゆき艦内を見る○松岡少尉に面会す○夕汽車にて帰京す(四月二十日)

- 結婚に付祝はれたる方へ返礼の物をくばる (四月二十三日)
- 戸山を写生す (四月二十四日)
- 春子及母と共に親類礼廻りを為す (四月二十五日)
- 戸山を写生す (四月二十六日)
- 清水谷公園にて桜花を写す (四月二十七日)
- 清水谷桜花の写生成る (四月二十八日)
- 勸業債券十通申込を為す (四月二十九日)
- 早稲田に森を写す (四月三十日)
- 早稲田の森成る (五月一日)
- 大坪邸に躑躅花を写す (五月二日)
- 春子及其他と共に夜六番町会堂に於て孤児院音楽会に列す (五月三日)
- 大坪邸につゝじを写生す (五月四日)
- 大坪邸につゝじを写生す第二図成る (五月五日) 自宅の事に付少しく家内に衝突あり (同日)
- 海の図の模写成る (五月六日)
- 大坪邸に写生す (五月八日)
- 風邪にて家にありツ、ジの花を写す○夜三宅と共に渡辺氏へゆき水彩画会の話を書き (五月九日)
- 大坪邸に白藤を写し始む○夜真野氏と共に中央公堂に音楽をきく (五月十二日)
- 大坪邸の藤花仕上る○春子少しく病む (五月十四日)
- 大坪邸の紅葉を写し始む (五月十五日)
- 大坪邸の紅葉を写す (五月十八日)
- 大坪邸の紅葉仕上る (五月十九日)
- 大久保村に芍薬を写す (五月二十一日)
- 上野明治美術会出品の梅の図非売品なりしも望む人ありて売却す (五月二十四日)
- 四谷を去り春子と共に小石川関口町永泉寺二階に転ず室は十畳なり諸事不潔に苦む (五月二十五日)
- 同日より我等の手にて食事を為す膳調はずして飯櫃の蓋を台にするなど奇観あり (五月十七日)
- 長野氏大坂より出京し快談す (五月二十九日)
- 春子と共に弥生町大下兄を訪ひ新橋小川に写真を撮り四谷より牛込を経て帰る○手塚光栄氏死去す (五月三十日)
- 水道町雨景を写生す (五月三十一日)
- 水道町雨景を写生す (六月一日)
- 水道町雨景成る○真野氏来り一泊さる (六月三日)
- 長野氏のために真野渡辺両氏と会し品海及隅田川に網船を浮ぶ○小坂象堂死去の報あり○此夜春子大に病む (六月四日)
- 朝久世山を写し午後真野氏と共に大坪邸に菖蒲を写す (六月六日)
- 久世山を写生す (六月八日)
- 久世山仕上る (六月十一日)
- 朝来頭痛甚し○三宅氏より兼て鳥山誠子を貰受けんとの事依頼され居りしが此日承諾の報あり (六月十二日)
- 日本中学校寄附のため伊東海岸の図を写す (六月十三日)
- 富士山の図を写す (六月十九日)
- 富士山の図成る○夜胃痛に苦しむ (六月二十一日)

- 関口駒込町三番地の新宅に転ず但建築落成せしにはあらず(七月一日)
- 上大崎村松本兄方へ春子紹介のため兩人ゆく(七月五日) 三宅氏来泊す(同日)
- 南面早稲田を望む大画を写生し始む(七月十一日) 三宅氏帰る(同日)
- 京都の伊藤氏来り終日快談す(七月二十四日)
- 倉成久米吉氏に始めて面会す(七月二十九日) 北海道の図を写す(同日)
- 福岡より早川銚太郎氏上京終日快談す○建築漸く成る(八月十日)
- 下婢わかを雇ひ入る(八月十八日) 小石川区役所へ入籍届を済ます(八月十二日)
- 春子懐妊にていわた帯を為す(八月二十二日)
- 早稲田の絵成り北面松の図を写す(八月二十三日)
- 結婚のため三宅氏小諸より出京滞留さる(八月二十六日)
- 三宅氏鳥山氏縁談熟し石本宅にて結納取為換のためにゆく(八月三十日)
- 吾家に於て三宅氏結婚の式を挙ぐ(九月三日)
- アーロンヘンリーの山水画を写す(九月四日)
- 巴里市街の図を写す(九月五日)
- ニューヘブンの図を写す(九月六日)
- 信州の丸山氏来り一泊さる(九月八日)
- 宮川氏に就き新宿植物御苑を見る(九月十四日)
- 真野氏を招き水彩画研究紀念会を開く(九月十五日)
- 子安村に原田先生を訪ふ(九月十八日)
- 東京出發信濃小諸三宅氏方に投ず(九月二十五日)
- 三宅氏と共に千曲川の山水を写す(九月二十六日)
- 丸山氏に伴はれ田中へゆき夫より根津村同氏宅に一泊す(九月二十七日)
- 信州田中小田中氏方の家を借りて住す(九月二十八日)
- 千曲川上流を写して成る(九月二十九日)
- 千曲川松原及浅間山を写す(十月一日)
- 千曲川対岸を写し始む(十月二日)
- 千曲川対岸を写す並びに松を写す(十月三日)
- 千曲川対岸を写す(十月四日)
- 田中出發午後帰宅す(十月五日)
- 戸塚村に森を写す(十月十日)
- 目白下に農家を写す(十月十三日)
- 神田高山に嫁せし姉病気の報あり(十月十六日)
- 駿河台産科婦人科病院に姉の病を訪ひ看病のため一泊す(十月十七日)
- 戸塚村に畑を写生す(十月十九日)
- 戸山の森を写す(十月二十二日)
- 早稲田に写生す(十月二十三日)
- 脚気再発医師に運動を禁ぜらる(十月二十四日)
- 病院に在る姉遂に死亡す此夜神田高山に通夜す(十月二十八日)
- 日暮里火葬場に遺骨を拾ふ 此夜神田に通夜す(十月三十日)
- 姉の葬式に列す光徳院に埋む(十一月一日)

高田村に杉並木を写す (十一月十四日)

巴里博覧会出品の爲め鑑別を受ける水彩画二枚採定の報に接す (十一月十六日)

東京発し神奈川県久保沢東屋に投宿す (十一月十九日)

小倉の山を写し午後相模川松原を写す (十一月二十日)

小倉の山の図成り午後松林を写す (十一月二十一日)

相模川上流を写す (十一月二十二日)

小倉の里を写す午後相模川を写す (十一月二十三日)

小倉の柳を写す午後相模川成る (十一月二十四日)

小倉の柳を写して成る午後久保沢出発夜に入て帰京す (十一月二十五日)

五日)

早稲田に写生す (十一月三十日)

水野正英氏に始めて面会す○丸山氏来り一泊さる (十二月三日)

春子結婚届受理さる (十二月七日) 鈴木為重氏も来り一泊さる (同日)

高田村に林の写生を為す (十二月十四日)

高田村に森を写し始む (十二月十七日)

原田先生病死の報あり猿楽町にゆき諸事周旋す (十二月二十七日)

高田村の森数面写生にゆき今日漸く成る (十二月三十日)

○経過

年の始めに於て余は定まれる住所を有せず新しき年は旅行先なる駿河国安部郡駒越村に於て迎へたり二月八日帰京して弥生町大下兄に寄食し同十三日根津須賀町青柳に下宿し関口駒井町の建築に干渉し

同三月九日四谷伝馬町宮嶋氏に転じ此間普請場監督の傍ら大久保辺の写生を為し四月十四日宮嶋はる子と結婚し同日相携へて鎌倉へゆき光明館に居る事四日鎌倉江の嶋を見横須賀に一泊軍艦富士を見同二十日帰京五月二十五日関口町永泉寺に仮居し七月一日駒井町の新築に移り九月二十五日信州に旅行して十月四日帰京十一月十九日相州久保沢に旅し同二十五日帰京爾来関口近傍の風景写生を為し新宅に在りて春子と共に年を送れり

○起居

旅行中は定まりたる事なし根津に在りし時は比較的早起したりき四谷に於ても同じ有様なり関口に移りて新に家庭を得て後は朝は大概妻と共に起出でたり夜は常に九時を以て臥床に入れり日課は定まれる事もなければ一週間の内六日は勉めて画筆を持つ事と定めたり土曜の午後は訪問日曜日は家に在つて客を俟つの定めとせり

○思想

四月以来我家の消息なるものを作りて時々筆をとりしを以て余の思想は多くそれによつて知る事を得べし只概して此年に於ては絵画の上には新しき希望を得しと実力を養ふ事の必要を一層深く感じたると家庭に於ける楽しさの如何に多く且深かりしかを味ひたるとは其尤も思想を多く動かせし問題なりしならんか

○健康

前掲日記の摘要によりて粗ぼ明になるべきも割合に健康に此年を送

れり頭痛、風邪、齒痛等も例年に比して少し只秋季に到って脚氣を患へ稍歩行に困難を感じ二日間医薬を服せしなり

○読書

新聞紙は読売及国民時事等交々首としてよみ時には中央、朝日、毎日、都、万朝報等をみたり雑誌は太陽、文芸俱樂部、新小説、天地人、めさまし艸、美術、美術評論等書籍には温知叢書の各種、百家説林、真書太閤記、基督伝、徒のなぐさめ、転業論、謡曲通解、大岡政談、自笑基磧全集、風来山人全集、逸話文庫、近世畸人伝、千山万水、天地有情、松むし陰むし、新声、千紫万紅、花影藤香、山紫水明、春花秋月、柳暗花明、明治十二傑其他数種

○学事

水彩画の風景写生四十八枚模写及売物模写三十枚油絵は執筆せず
 春期明治美術会展覧会へ二面出品し売面を売却し秋季陳列館に九面を出し売面を売却す画架に向ひし日九十五日にして内戸外八十一日なり

巴里博覧会出品鑑別を受けんがため三面陳列花園及初夏採定となり
 十二月巴里へ向け輸送せり

作文には羽衣日記、浅間のすそ、小倉の秋及我家の消息あり

○経済

収入に於ては水彩画売却代金四拾六円五拾銭を得たるのみ支出は関口駒井町家屋新築に約千七百七拾円結婚費用に金六拾参円世帯道具買

入代に金百弍十弍円を費し其他衣食交際臨時の費途に金五百円メリヤス器械買受代金五拾円を費し十二月三十一日現在の財産は関口駒井町地所建物金弍千弍百円日本勸業銀行株金参百円同売価超過金百円勸業債券弍百円に安田銀行預金五百円返済の見込ある貸金百円衣類及調度書籍等にて金六百円現在金参拾円通計金参千九百円也

○家族及親戚の動静

余が第一の家族として四月十四日妻春子は来れり姓宮嶋父は貞吉と称し台南県庁事務嘱託員なり母はふみといひ四谷伝馬町に住す弟三人第一を信康と云ひ十三才次を龍雄七才次文雄六才妹二人一をまさ子と云ひ十八才一を清子といひ十才春子は年二十歳なり春子に關する親戚には父貞吉兄宮嶋信吉姉種田某母方の親類には伯父村井一市叔母秋山しげあり春子余の方に到りて以来時々動氣を病み又屢々医師の手を煩す事あり結婚して直ちに懐妊し来る一月には初児を挙げんとす

神田高山家は極めて平穩に且益々繁昌なり此年二月十二日は還暦の祝なりとて上野梅川楼に於て各組合の会員に招かれ金盃を受けたり
 十月二十八日には高山家に嫁せる我が姉琴子長逝せり病氣は子宮癌なりといふ大下家松本家皆無事なり

春子里方宮嶋家にては初め四谷に住せしも九月十三日麴町富士見町に移り煙草業を営みたり家族皆無事なり他の親戚にも別条なし

○交友

互の心事を遠慮なく語るの友は真野、三宅、早川、丸山の四氏にし

て比較上懇親なるは渡辺勘次郎氏なり石川氏とは親密なれ共相見ること多からず石田、木村、渡部氏の如きは時々往来するも少しく思ふ処ありて藤村氏とは遠々しくなれる画家の友には中丸、大久保、有吉、都鳥、伊藤、水野、吉田等あり秋には河合新蔵氏及水野正英氏に逢ひたり小笠原、山中、長野、磯野、森脇等の諸氏とは時々書面或は会合して交を絶たず軍艦に在て知己を得たる諸氏のうち松居、松岡、鈴木、大塚の諸君とは尤も親しく為せり芥川氏は病の故を以て未だ一回も来られざれと書面にては屢々意志を通せり吉沢氏も又往々書状あり

原田先生は十二月二十六日を以て長逝せられたり遺憾極まりなし在濠州の玉木中村の諸氏も時々通信あり

○雑事

巴里博覧会出品の水彩画は一を初夏と題し元価金六拾円売価金貳百五拾円他を花園と題し元価金四拾円売価金貳百円となせり

此年に於て新に作りし衣類調度は黒羅紗二重廻し一枚霜降背広壱組ハス綾背広一組黒緞三紋羽織壱枚黒線コム靴夏赤皮半紐靴壱足鼠帽子壱個夏帽子一個来客用夜着壱枚四布壱枚三布壱枚五布一枚座布団拾枚惣桐箆筒壱棹客室用道具数点其他雑品なり

来客は三百参拾名にして前年より百三十名を増し訪問は貳百四十八名にして前年より百九名を増し来状は三百九十名にして前年より百六十六通を増し発状は四百四十六通にして百九十五通を増せり

明治三十三年のことを記す

明治三十三年のことを記す

○

明治三十三年は吾家に極めて幸福なりき希望を以て迎へし此年は更に大なる希望を抱いて送れり吾技術は日と共に進歩せり吾家庭は極めて平和なり年の始めに於て吾家族の一人は増し爾来壮健淋しかりし吾家庭をして屢々笑声を発せしむ吾は又此年に於て求めて得易からざる親友を得たり吾の此人によつて受けし処の利益は其職業の上のみならず家庭の上にも極めて大なりしを信ず美術極めて生産的研究を為してある吾の昨今の事業を心より同情して吾をして益々決心を堅からしめしむ又此人なり吾頃来の憂たる生活方法問題を歳晚感ずる処ありて更に数年を地方に送りて一層の研究を積まんとするの決心によりて大に其急を避くる事を得たりあはれ十九世紀の末年たる此年に於ける吾等の幸福なりし事よ

明治三十四年一月 大下藤次郎手記

○日記摘要

小石川区関口駒井町三番地の自宅に在り早朝新年の式をすます家族は妻一人にして他に下婢一人在り(一月一日)

市中知人の許に廻礼す(一月二日)

四谷より清子龍雄来り泊す(一月三日) 是夜帰宅す(一月七日)

松岡国男松岡静雄両氏来り語らる○春子分娩の気あり夜より産婆来り話さる(一月九日)
 春子産気ありて分娩せず医師水原来る(一月九日)
 午前八時二十分男子出生す○宮嶋母文雄と共に来り泊す(二月十日)
 中丸精十郎氏渡欧の送別会を神田開花楼に開く余は幹事たるの故に週旋につとむ○今日より弥生町鈴子来り手助けを為す(二月十二日)
 中丸氏告別の挨拶を受け午後日本橋百尺にゆく酒席に於ける真野氏の体度を見て感あり(一月十三日)
 大崎村松本兄明磨を伴ひ来る(一月十四日)
 中丸氏渡航出発を新橋停車場に送る(一月十五日)
 生児七夜にて其名を正男と命ず(二月十六日) 宮嶋母帰宅す(同日)
 目白原樹木の絵成る(一月十七日)
 フヒジー嶋の図一枚成る(一月十八日)
 宮嶋父台南より帰る直ちに訪問す○目白下に雪景一枚成る(二月十二日)
 シドニーの図一枚成る(二月二十四日)
 メルボルの図一枚成る○鈴子帰す(二月二十五日)
 ブリスバン河の図一枚成る(二月二十六日)
 中央气象台に岡田氏を訪ひて不逢○原田未亡人を訪ふ又不逢(二月二十七日)
 初めて田山録弥氏に面会す(二月二十八日)
 サンドゲートの図一枚成る(二月二十九日)
 フヒジー嶋の図一枚シドニー嶋の図一枚かく(二月一日)
 シドニーの図一枚成る(二月二日)

シドニーの図一枚成る(二月三日)
 亡姉百ヶ日に付光徳院法会に列す(二月四日)
 ケープモルトンの絵をかく(二月五日)
 メルボルの図一枚成る(二月六日)
 赤道直下の図成る(二月七日)
 スバ港の図成る○正男医師の診察を受く(二月八日)
 ブリスバン河の図一枚成る(二月九日)
 本多先生を訪ひ作画の批評を受く(二月十一日)
 興津の絵画き直す○高山久次郎に断縁として金円遣す(二月十二日)
 春子里方へゆく○軍艦甲板上の図にかゝる。巴里博覧会出品画補助金貳拾円下附さる(二月十三日)
 軍艦上甲板の図をつゞく(二月十四日) 誠子来泊す(同日)
 軍艦上甲板の図成る(二月十五日)
 中央气象台に岡田氏を訪ひ雲の説をきく(二月十六日)
 三保の富士一枚駒越海岸一枚成る(二月十七日)
 シドニーの図一枚成る○誠子帰宅す(二月十九日)
 風邪にて終日臥床に在り(二月二十日)
 軍艦上甲板後部の図をかき始む○風邪快癒(二月二十二日)
 軍艦上甲板の図をかき続く○正男祝物の礼を配る(二月二十三日)
 軍艦上甲板の図成りプープの図にかゝる(二月二十四日)
 プープの図成る○名和中佐来る(二月二十五日)
 二月二十六日には溪流の図一枚日野の図一枚かく(二月二十六日)
 清水谷桜花の図をかき直しにかゝる(二月二十七日)
 清水谷の図成る(二月二十八日)

- プリスバン河の図をかき始む (三月一日)
プリスバン河の図仕上く (三月二日)
音羽近傍の畑を写して成らず○売画一枚かく (三月五日)
売画二枚かく (三月六日)
目白踏切りの樹木を写生し始む○売画一枚かく (三月七日)
売画二枚かく (三月八日)
目白の樹木成る○売画一枚かく (三月九日)
売画二枚かく○隣家手塚氏大井村に移る (三月十日)
雑司ヶ谷墓地に梅を写し始む (三月十二日) 宮嶋家は秋山方へ同居す (同日)
梅の写生をつゞく○真野氏と共に林亭に播磨の浄瑠璃をきく (三月十三日)
梅の図成る○売画一枚かく (三月十四日)
売画一枚かく (三月十五日)
売画一枚かく○明治美術会準通常会員より通常会員に転格す (三月十六日)
売画二枚かく○春子正男を伴ひ親類廻りを為す (三月十七日)
売画一枚かく (三月十九日) 売画一枚かく (三月二十日)
売画一枚かく○明治美術会開会余の出品五十六点 (三月二十一日)
雑司ヶ谷田甫写生す (三月二十三日)
雑司ヶ谷に紅梅を写し始む○誠子来泊 (三月二十六日)
売画一枚成る (三月二十七日)
紅梅の図成り松の図に移る○丸山氏来り泊らる (三月二十八日)
檜の木 of 図写生にかゝる (三月三十日)
- 檜の木 of 図成る○明治美術会出品画の陳列替を為す (三月三十一日)
写生にゆきしも絵を得ずして帰る○清子帰宅す (四月二日)
真野氏と共に目白原に池を写して成る (四月三日)
下総布佐にゆき松岡氏に投ず○桃花の図一枚を得たり (四月五日)
押付村朝景色の図一枚成る (四月六日)
手賀沼写生を為す (四月七日)
松岡氏を辞し正午帰宅す (四月八日)
売画一枚かく (四月十日)
売画一枚かく○春子稲田へ見舞に遣す (四月十二日)
売画二枚かく (四月十三日)
音羽護国寺桜を写して成効せず○午後雑司ヶ谷へゆきしも絵成らず (四月十四日)
山吹の写生にかゝる (四月十六日)
音羽の桜成る○売画一枚かく (四月二十日) 売画一枚かく (四月二十一日)
十一日)
売画二枚かく (四月二十二日) 売画二枚かく (四月二十三日)
売画二枚かく (四月二十五日) 売画二枚かく (四月二十七日) 売画二枚かく (四月二十八日)
明治美術会大会及び懇親会に出席す (四月二十九日)
菜花西の方を写生し始む (四月三十日)
菜花西の方の図成る○春子十善会々員となる (五月一日)
売画一枚かく○正男のため乳母車を求む (五月二日)
売画一枚かく (五月三日) 売画一枚かく (五月四日)
菜花東の方を写し始む (五月五日)

- 洋画青年会へ出席す（五月六日）
 売画二枚かく○春子宮嶋へゆく（五月七日） 売画二枚かく（五月八日）
 日）
 売画一枚かく（五月九日）
 菜花東の方写生をつゞく（五月十日）
 菜花写生をつゞく○売画一枚かく（五月十一日）
 菜花の図成る（五月十二日） 売画三枚かく（五月十四日）
 目白に黄艸花を写し始む○売画一枚かく（五月十五日）
 草花写生をつゞく○売画一枚かく（五月十六日）
 草花を写して成る（五月十七日）
 早起目白原に朝霧を写して成る（五月十八日）
 売画一枚かく（五月十九日）
 上野花山亭に於ける洋画青年会に出席す（五月二十日）
 売画三枚かく（五月二十一日）
 日光へゆき南谷照学院に投宿す（五月二十二日）
 湯元へゆき吉見屋に投宿す（五月二十三日）
 残雪の写生にかゝる（五月二十四日）
 残雪の写生成り后日光へ帰り照学院に居る（五月二十五日）
 瀧の尾杉並木写生にかゝる（五月二十六日） 杉並木写生をつゞく
 （五月二十七日）
 杉並木写生をつゞく（五月二十八日）
 照学院庭を写生し始む（五月二十九日） 庭の写成る（五月三十日）
 杉並木の写生をつゞく（六月一日）
 杉並木写生成りぬ○大谷川の朝を写す○日光祭礼を見る（六月二日）
 日光出発帰京す（六月三日）
 売画一枚かく（六月四日） 売画一枚かく（六月五日） 売画四枚かく
 （六月六日）
 売画三枚かく（六月八日） 売画三枚かく（六月九日） 中村兼助入門
 す（同日）
 日光湯元の大画にかゝる○売画一枚かく（六月十二日）
 植物園に菖蒲を写生す○春子宮嶋へゆく（六月十三日）
 菖蒲写生をつゞけしも成らず○売画一枚かく（六月十四日）
 売画一枚かく（六月十五日） 売画一枚かく（六月十八日） 売画一枚
 かく（六月十九日）
 売画二枚かく（六月二十日） 売画一枚かく（六月二十一日）
 日光大作をかきつゞく○売画一枚かく（六月二十二日） 日光の大画を
 つゞく（六月二十三日）
 雇女を解傭す（六月二十四日）
 日光の大画をつゞく○売画一枚かく（六月二十五日）
 日光大画をつゞき売画一枚かく（六月二十六日）
 日光の大画をつゞく○売画一枚かく○真野氏の紹介にて竹下氏に始め
 て面会す（六月二十七日）
 日光の大画をつゞく（六月二十八日） 日光の大画をかか（六月二十九
 日）
 日光湯元の大画漸く成る（六月三十日） 鈴子手伝に来る（同日）
 今日より蚊帳を用ふ（七月一日） 売画二枚かく（七月二日）
 売画三枚かく（七月三日） 売画三枚かく（七月四日） 売画二枚かく
 （七月五日） 売画三枚かく（七月六日）

売画一枚かく○山吹の絵かき直しにかゝる(七月八日)
山吹の絵書き直しを為す○売画一枚いかく(七月十日) 山吹の絵成る(七月十一日)
売画二枚かく(七月十二日) 売画一枚かく(七月十三日) 売画一枚かく(七月十四日)
鈴木油絵肖像に取りかゝる(七月十六日) 売画二枚かく(七月十八日)
宮嶋子供清子及龍雄来る続いて泊る(七月二十一日)
鈴木油絵かき続く(七月二十一日) 鈴木油絵かきつぐ(七月二十三日)
売画一枚かく○春子宮嶋へゆく(七月二十六日)
岐阜より長野来り竹下等と共に快談す(七月二十八日)
鈴木油絵をかきつぐ(七月三十一日)
植物園内に蓮池を写す(八月一日) 蓮池を写す(八月二日)
蓮池の図成る(八月三日) 長野氏に戸山の森一面を贈る(八月五日)
植物園に蓮池を写し始む(八月六日) 蓮池写生をつゞく(八月七日)
蓮池写生をつゞく(八月七日)
蓮池写生をつゞく(八月八日) 蓮池写生成る(八月十一日)
ダンドクの図を写し始む(八月十四日) 本多先生及渡部鋏氏に作画を示す
ダンドクの図成る○春子宮嶋へゆく○清子龍雄帰る(八月十六日)
ダンドクの花を写し始む(八月十七日) ダンドクの花写生をつゞく(八月二十二日)
ダンドクの花成る○竹下氏に戸山の図一面を貸す(八月二十三日)

田山氏に諏訪の森一面を貸す○少しく風邪となる(九月一日)
独乙に軍艦受取にゆかれし松岡少尉帰朝訪問さる(九月三日)
戸山遠望を小画を写生す(九月六日) 売画一枚かく(九月七日)
薄の図写生にかゝる(九月八日) 薄の図をつぐ(九月十日)
薄の図をつぐ(九月十一日) 薄の図成る(九月十四日)
水彩画写生記念日にて真野氏と共に目白原に秋艸を写し帰宅後酒盃を手にし万歳を唱ふ(九月十五日)
春子宮嶋へゆく(九月十六日)
目白原に終日写生第二薄、第三薄の図をかき始む(九月十七日)
第二ス、キ第三ス、キの図をつぐ(九月十八日)
第二ス、キ第三ス、キの図をつぐ(九月二十日) 鈴子帰宅す(同日)
第二ス、キ写生成り第三ス、キの写生をつぐ(九月二十一日)
近在より女中来る(九月二十二日) 女中家に帰る(九月二十四日)
火事艸の写生を為す(九月二十五日) 第三ス、キ写生をつぐ(九月二十六日)
第三ス、キの写生漸く成る(九月二十七日)
暴風雨幾多の見舞人来る幸に損害なし(九月二十八日)
三宅氏夫妻来り一泊さる(九月三十日)
春子半田へ遣す(十月二日) 秋海棠の写生を始む(同日)
秋海棠の写生をつぐ(十月三日)
秋海棠成る○夜分妻と共に竹下氏を訪ふ共に己分居亭へゆく(十月四日)
目白原池のほとりを写生し始む○夜分三宅と共に田山へゆく(十月五日)

竹下氏夫妻と共に上野へゆき白馬会を見る (十月七日)
 鈴木油絵肖像仕上を為す (十月九日)
 目白原池のほとりの絵成る (十月十日)
 鈴木油絵肖像引渡す (十月十一日)
 午後より高田に大根畑を写生し始む (十月十二日) 丸山氏来泊 (同日)
 越前より下女来る (十月十三日)
 目白原に木の下艸をかき始む○稲吉氏死亡春子宮嶋へゆき一泊す (十月十六日)
 早起横浜埠頭に丸山、河合、満谷、鹿子木等の渡米者を見送り帰途松本へ立よる (十月十七日)
 木の下艸写生をつぐ (十月十八日) 春子宮嶋へ遣し一泊す (同日)
 木の下艸写生をつぎ紅葉樹をかき始む (十月二十日)
 春子十善戒をうく (十月二十一日) 春子宮嶋へゆく (十月二十三日)
 大根畑の図成る○地所払下に付堀基来る (十月二十四日)
 木の下艸及紅葉写生をつぐ (十月二十五日)
 木の下艸をつぎ紅葉写生成る (十月二十六日)
 神田高山よりの招待にて亡姉一週忌法事にゆく (十月二十七日)
 光徳院に於ける亡姉一週忌法会に会す (十月二十八日)
 正男風邪医師の診察を受く (十一月二日)
 竹下氏及豊田氏と共に上野に絵画展覧会を見る (十一月四日)
 木の下艸写生をつぐ○本郷伊勢屋に於ける洋画青年会へ臨む (十一月五日)
 木の下艸の図成る一週日を此絵に要せり○竹下を訪ひ小鳥を銃殺す

るの人情に反するを論ず (十一月六日)
 植物園に菊花を写生す (十一月七日)
 岡部の貸金をとり真野と共に富士見軒に会食す (十一月八日)
 春子弥生町及団子坂へ遣す (十一月九日)
 早稲田小流の写生にかゝる○大隈邸に菊を見る (十一月十三日)
 早稲田小流の写生をつぎたり○稲村の写生を仕上く (十一月十四日)
 春子宮嶋へゆく○午後早稲田小流の写生成る○三宅出京来泊す (十一月十五日)
 早稲田赤城森写生にかゝる (十一月十九日)
 赤城森写生図成り次に田甫を写して成る (十一月二十日)
 高田水車小屋の写生成る (十一月二十一日) 高山だいたい結婚につきゆく (十一月二十三日)
 森脇英雄氏米国より帰朝に付真野氏と共に新橋へゆく (十一月二十四日)
 青梅に旅し坂上に投ず石川氏既に在り (十一月二十五日)
 青梅地獄谷の朝景写生し始む○船水車の図成る (十一月二十六日)
 地獄谷写生成る○中洲の水車を写生す (十一月二十七日)
 岩石の写生にかゝる成就せず (十一月二十八日)
 石川氏と共に帰京す (十一月二十九日)
 春子半田及宮嶋へ遣す (十二月四日)
 目白富士見台に富士を写し始む (十二月五日) 富士の写生をつぐ (十二月六日)
 富士の写生成る (十二月十一日)
 風邪となり不快言ふべからず写生に出しも執筆せずして帰る (十二

月十三日)

竹下のために写せしポウエル氏海の凶漸く成る(十二月十四日)

本多先生に絵を所持批評をきく○竹下氏及横地氏来る○四谷宮嶋家及村井家と衝突あり仲裁にゆき深更漸く局を結ぶ(十二月十六日)春子宮嶋へ遣す(十二月十七日)

高田に於て松林を写し始む(十二月十八日)

春子乳の治療をうく○大倉来り同志批評会の相談あり(十二月二十日)

水彩画の葉を作らため図書館へゆく(十二月二十一日)

竹下氏より忘年会招待ありてゆく席に在るもの宇山、豊田、横地、

小嶋主人及余の六人と他に寺中といへる騎兵中尉あり(十二月二十二日)

風邪にて困しむ。洋画青年会幹事に撰まれし旨通知あり(十二月二十四日)

三宅氏全家出京新宿に家し此日面会す(十二月二十五日)

高田松林の写生をつゞく(十二月二十七日)

青梅移住のことあり取調を兼ね年頭の煩を避けんがため旅立ち坂上に投宿す○鶴沢氏及び広瀬氏に面会す(十二月三十日)

多摩川上流の写生を為す成らず(十二月三十一日)

○経過

新に家庭を作りし初めての新年なればとて久し振りにて都門に初春を迎へ一月二月の頃は展覧会に出すべき濠洲風景の書き直しに忙しく三月梅咲く頃より近郊の写生を試み四月五日桃花を写さんがため

下総布佐に旅し居ること三夜同八日帰京桜花の写生に近傍の寺院をたづね或は家に在て庭園の菜花を写し五月二十二日新緑を写さんと思ひて日光にゆき湯元に残雪を描き六月三日帰京当時暑中にて戸外写生に不便多く常に家に在りて売画を描き八月は植物園に花物数葉を写し九月十月の頃は目白原に於て芒の写生をつとめ此年に於ける入念の作二三を得十一月は黄熟せる田甫へ出でて秋の収穫を写し同月二十五日青梅に旅行し二三多摩川沿岸の風光を捕へ二十九日帰京爾来二三の作あるのみ俗事に多端して閑乏しく漸く十二月三十日に及び再び青梅に旅し同地に於て此年を送れり

○起居

起床の時間は四季日出時を以てし就床は午後九時の定めを違へし事なし一週の内五日半を写生の時とし雨ある時は画室に於て売画を作る事あり土曜日午後は来客を待つ定めとし日曜日は又画筆を手にせず友人の訪問等に宛つ土曜日の晚餐は常に増して肉多かるべく日曜日の間食は手製の滋味あり通常の日にては夜間は用器画及英学の独習を為し休日にては読書を為す理髪は毎月一回にして顔は自ら剃刀を採り入浴は昼間暇ある時を以てす

○思想

わが家の消息は引続き筆を執れり我思想の一般は是によつて知る事を得べし殊に記すべきは此年に於て一層希望を抱えしと共に肉體上の快樂小名譽の心去りて猶十余年研究のために犠牲にせんと思ひし事なり要するに吾思想は此年に於て益々高潔に益々透明となりしな

り

○健康

終歳医師の診察をうけず前年苦しむたる脚気も起らず只時々風邪のため一二日を不愉快に過せし事あるのみ

○読書

主として読みたる新聞紙は時事新報なり社会の弊風打破に力むるを以てなり時として二六新報、万朝報、富士新聞、大和新聞、報知新聞、大平洋、下野新聞、福岡新聞、京華日報、人民、読売新聞等を見たり雑誌は太陽、新小説、文芸倶楽部、ほととぎす、明星、美術評論等書籍には不如帰、自然と人生、童蒙教艸、名婦鑑、泰西婦女風俗、人間社界、イソツプ物語、落語全集、紀行全集、自恃言行録、近世美学、十九世紀、欧米漫遊雜記、外交奇譚、ふるさと、家庭叢書、福翁自伝、修養録其他数種

○学事

水彩風景画の写生は四十八枚にして内数枚は成効せず書き直しは二十八枚にして重に濠洲の風景なり売画として半は想像によつて画きしもの九拾七枚あり油絵は肖像画一枚を画くのみ
 春期美術展覧会は五十六枚を出品し内二面を売却せり
 巴里万国博覧会へ出品せし二面の絵に對し賞与金として金貳拾円を受けたり
 教をうけたしとて来るもの中村、横山二人あり批評を受んとて来る

もの佐藤、揖斐、三宅、久野等あり

作文には吾家の消息、山菅日記等なり

画架に向ひし日は百九十七日にして内戸外九十六日なり

○経済

収入に於て水彩画売却代金八十八円貳拾五錢貸金回収金七十三円銀行利子其他雜収入金八拾三円拾五錢計金貳百四拾四円四拾錢にして支出は經常衣食交際修学衛生等の費用に金四百五拾八円臨時費用に金六拾七円計金五百貳拾五円なり

十二月三十一日現在の財産は関口駒井町地所建物金貳千貳百円日本勸業銀行株金參百円売価超過金七拾五円安田銀行当座預金八拾円東京信用銀行預金貳百五拾壹円五拾錢返済を受くる見込ある貸金四拾円衣類調度書籍等物品見積価格金六百元現在金四拾四円五十錢合計金參千五百九十壹円也

○正男日記

曇り且少しく雪降れる極めて寒き日午前八時二十分男児生る体格極めて小に量は僅に六百五十八匁（通常七百五十匁）に過ぎず分娩の時一度絶息せしも忽ちにして蘇生す泣く声細く形体美ならず直ちに母の乳に養ふ産婆は西尾礼子医師は水原漸なり（一月十日）
 正男と名づく正月に生まれし男子といふのみならで又正しき男子となれかしと願ひてなり（一月十六日）
 正男出産の届出を為す（二月十七日）
 少し不快の様子あり○毎日一回夜入浴す○容貌漸く美しくなる

(二月二十四日)

宮嶋老父母は勿論惣ての人正男を愛すること甚し祝ひ物を受けしは宮嶋両家、大下、松本、高山、稲田、稲吉、玉村、真野、渡部、半田、村井等なり(二月三十一日)

吐乳屢々なるを以て医師長塚の診察を受く不消化病なりといふ母の乳多量なるを以てなり○哺乳は三時間毎に与ふる定めなり体量「空欄」刃なり(二月八日)

病氣全治し益々愛嬌をます(二月十四日)

よく物を見又絶えず何事かを語る(三月一日)

吐乳且つ少しく熱あり暫時にして治す(三月八日)

正男晴着出来す三紋黒羽二重下着は八丈なり(三月十六日)

正男母親と共に祝ひ物受けし家々へ礼に廻る(三月十七日)

乳母車を求む(五月二日) 大川に撮影す(五月二十八日)

初の節句なりしも祝物を謝し代りに乳母車を求め家にては只柏餅を作りしのみ(五月五日)

体格整ひ且大に運動劇しく壮健となり五音も分明となれり色白くして誰にもよく笑ふて向ふるを以て大に愛せらる(六月十二日)

今日初めて足を伸て坐する事を得たり(六月十三日)

自己の意に反する時はヤイノノ々々なぞ連呼し反り返りて大にもがく(六月二十四日)

今日より正しく横に寝せ置きしも起き返る事を得る様になれる(七月八日)

常にパイノノノノとかたる。大小便戸外になす事となる(七月九日) 好みて葡萄酒をのみ亦牛肉ソップを飲む(七月二十日)

日没同時に臥床に入るの習慣をつけ始む(七月二十二日)

前上歯二本出つ(七月三十日)

這ひ出すことを覚ゆ(八月二十一日)

よく笛を吹く又屢々起たと試む(十月八日)

物につかまって起つ事を得(十月十日)

風邪のため医師長塚の診察を受く熱極めて高し(十一月二日)

全快す母親の手に在りて眠りかね父に來りて安眠する事あり(十一月六日)

○家族及親戚

妻の春子は一月十日嫡男正男を分娩して以來極めて健康となれり

弥生町大下家にては前年と異なる事なし次女鈴子十二月より本郷渡部女学校へ通学すとときく

目黒松本家も無事なり年末増俸ありしと

神田高山家繁昌不相変なり十一月二十三日榎川和定を迎へて代子の養子となせり

宮嶋家にては一月老父台南より歸京し四月麴町の煙草店を売却して秋山に同居し五月頃元の住所伝馬町一丁目に移り爾來無事なり

稲吉■八郎氏には夏以來病氣なりしが十月十七日遂に死去せり

其他の親類惣て変れる事なし

○交友

真野氏とは不相變親密にせり早川氏とも書信の上に於て同事なり氏の病氣は一時氣遣ひたるも猶不相變持續せり三宅氏信州にありしが

十二月出京せられたり面白からぬ事屢々耳にするを以って心を空ふる能はさるも猶親友といふを得べし森脇氏は十一月二十三日米国より帰京し爾來病を得て病院にあり親交旧の如し新に得たる友として松岡、岡田、田山、小嶋、竹下等其他数氏あり就中竹下氏とは意気投合十年知己の思ひあり田山氏ともよく語る岡田氏よりは随分上の知識をうくる事多し中川、高野、山田、大倉、倉田等の人々も相会する事あり軍艦に於ける犬塚氏には相逢ふるなかりしが名和氏松岡氏等は来遊さるゝ事あり鈴木氏とも交を絶たず長野氏は夏中出京屢々相見たり教をうくる事多し丸山氏との間はいつも円満なり氏に對して三宅氏に對する如き感情を生せず青梅鶴沢氏も年末新たに得し友の一人なり交の殆ど絶えんとするは渡辺、有吉、藤村等の人々にて我からさけて逢はず石川、木村等には時々会するあり石田氏は帰国せりしか渡辺勤次郎氏は人非人絶交の姿なり伊藤、水野、小笠原、中丸、芳川、磯野、大城等の諸君とは書状の交通前の如し

○雑事

主人の衣類として新に作りしものは綿大嶋の綿入羽織一枚のみ平生着の洋服一組裏返しを為せり写生靴、足洋傘、本は新に得たるものなり

春子は明石の単衣平常着単衣二平常着袷一同羽織一東コート、袴着及絹ブラシ肩掛等を求む

正男は産衣黒羽二重三枚及八丈縞下着其他平常着数枚作る

来客は三百六十名にして前年より二拾九名を増し訪問三百名にして前年より三十三名を増し来状三百七十九通にして前年より十二通

減し発状四百十五通にして前年に比し三十一通を減せり

※判読できなかった文字は■で表した

【論考】

本稿では前回に引き続き、大下藤次郎の日記のうち明治三十年から三十三年分に記された内容を紹介した。

前年までに大下は、制作の中心を油彩画から水彩画に移し、積極的に屋外写生に出かけるようになっていた。同時に欧米への留学を夢に描くようにもなった。

明治三十年は、自宅のある東京近郊で写生を行ったほか、泊まりがけで箱根、葉山、日光などに写生旅行に出かけた。同時に海外留学に向け、二月より「イーストレーキの家塾」(アメリカ人の英語教育家、F. W. Eastlake 1856-1905か)に通い、英会話の学習を始めた。留学については、滞在費のかかるヨーロッパではなく、アメリカに渡って生活費を稼ぎながら二、三年留学することも考えていたようだが(二十九年の日記参照)、三十年の「思想」欄にあるとおり、先に渡米した三宅克己からの情報により、労多くして功少なしと判断したようだ。その代わり、海軍の遠洋航海船に乗り組んで海外に出かけることとし、年末からその調整を始めた。

この年には、前年の水彩画展に出品した絵が売れたほか、油彩の肖像画によって多少の収入を得ることができた。肖像画以外の人物

画には、六、七月に中丸精十郎（二代目）のアトリエで行った裸体モデルの写生がある。裸体モデルを描いた水彩は現在三点が確認されており（いずれも当館蔵）、大下の数少ない人物画として注目される。そのほかは、専ら水彩風景画を描いた。四月十八日には明治美術会に油彩画一点、水彩画十一点を出品し、これが同展への水彩画初出品となった。

明治三十一年三月、海軍の練習艦「金剛」に、明治美術会の特派員として乗り組み、オーストラリア、フィジーを巡る半年間の航海に出発した。航海の概略は日記に記されているが、さらに詳しい経緯を記したものに「曙日記 其一 北太平洋の巻」と題された冊子がある（当館蔵）。表紙には「明治三十一年十月 箱根宮の下龍雲館に於て」との書き込みもある。日記の十月六日の項に「あけぼの日記を書き始む」と記されているのが、これであろう。ただしこの冊子の記述は四月十一日で終わっており、続きが書かれたかどうかは不明である。なお「曙日記」は、近藤信行編『大下藤次郎紀行文集』（昭和六十一年、美術出版社）に翻刻されている。

航海中に水兵の生活などを描いたスケッチは、鉛筆の線を主として淡彩を施したもので、日付やメモが添えられた臨場感あるものが多い（図1、2）。オーストラリアおよび船上からの風景画には、[898]（明治三十一年）の年号があるものが十一点存在する（いずれも当館蔵）。これらは丁寧な彩色された緻密な水彩画で、帰国後に仕上げられたものと考えられる。「曙日記」執筆開始と同じ十月六日の日記に「濠洲航海中の画を仕上始む」との記述が見えるので、帰国後保養に出かけた箱根で絵の仕上げを始めたと考えられる

が、明治三十三年の日記にもオーストラリアの風景を「書き直し」したという記述が散見される。これについては後述したい。

明治三十一年には明治美術会創立十年記念展覧会が開催され、渡航直前の大下も、描きためていた四十点の水彩画を出品した。帰国後は各地の水彩写生にいそしみ、「学事」欄には「油絵には一度も筆を取らず」と記している。翌年以降の日記には、肖像画制作をわずかに請けた以外に、油絵を描いた記録はない。いよいよこの年から水彩画一本に道を定めたということになる。

つづく明治三十二年には、私生活に転機が訪れた。四月、宮嶋春子と結婚し、かねてより切望していた自分の家庭を持つこととなった。翌年一月には長男、正男が誕生。三十三年からの日記には「正男日記」なる項目が登場し、子煩悩ぶりを示す記述が並ぶ。

一方、三十二年十二月二十六日には敬愛する師、原田直次郎を失った。師事を始めた頃からすでに病床にあった原田のもとに、大下はよく通い、絵の批評や芸術論に耳を傾けた。病状が悪化してからもしばしば原田を訪ね、海外渡航についても相談をした。原田は大下の渡航中に病氣療養のため神奈川の子安村に転居し、最期は入院をしていたが、葬儀は東京の自宅で、大下らの周旋により執り行われた。

三十二年にはパリ万博の監査に三点を提出し、うち二点が万博出品となった。明治美術会にも引き続き出品したが、三月十二日の日記に「明治美術会へ水彩画二面出品す猶多く所持せしも三宅氏の勧誘により出品を見合せたり」とある。続いて「溜池白馬会研究会に黒田氏の講義をきく」とあるため、白馬会にこの年水彩画四十三点

を出品した三宅克己が、大下を白馬会へ勧誘したようにも見える。しかし大下は翌年に明治美術会の準通常会員から通助会員になり、三月の同会展覧会には水彩画五十六点を出品するなど、明治美術会にとどまっている。同会は翌三十四年に改革の騒動が持ち上がり、三十五年一月に太平洋画会へと改称したが、大下は引き続き太平洋画会に参加した。白馬会に批判的な態度をとっていた大下が、白馬会のために明治美術会への出品を見合わせたとは考えにくい。

他の原因を探ってみよう。同年の日記には、「みづゑ会設立の相談を為す（二月五日）」、「水彩画会の事に付三宅氏と共に上野公園内高橋氏を訪ふ（三月十九日）」、「夜三宅と共に渡辺氏へゆき水彩画会の話をする（五月九日）」といった記述がある。以降、日記にはこの会についての記述がなくなるが、平行して書かれていた手記「吾家の消息」（当館蔵）から、より詳細な経緯を知ることができる。この会は、大下と三宅が中心となって他の画家にも呼びかけ、同年秋に上野で水彩画展覧会を開催しようという試みだったようだ。しかし大下、三宅とも十分な作品を出せる見込みがないとして、八月二十六日の時点で開催を見送る判断がなされた。この頃から二人の間に徐々に溝ができていたことも遠因となったと思われる。先述した明治美術会展への出品見合わせは、この水彩画展のためだったのだろう。これがなくなつたためか、翌年の明治美術会展には、大下は五十六点もの出品をした。

翌三十三年の日記では、オーストラリア風景の「書き直し」と、「売画かく」という記述が目立つ。「学事」欄を見れば、オーストラリア風景は明治美術会の展覧会に出すためのもので、九十七枚にも

のぼる「売画」は「半は想像によつて書きしもの」だったことが分かる。この二つの事柄について、以下に詳しく見てみたい。

まず後者から。「売画をかく」という記述が頻出するのは、家庭を持ったことで、より多くの収入を得る必要が生じたためだろう。前年の「学事」欄にも、「水彩画の風景写生四十八枚模写及売物模写三十枚」とある。三十二年の「吾家の消息」十月十日の項には西洋人向けの土産、いわゆる「横浜絵」の模写を始めたことが、三十年三月十三日の項には家計の厳しさと生活への不安から、悩んだ末に自ら「横浜画」を描くことを決意したことが、綴られている。

次に、明治美術会に出品したオーストラリアの風景画について考えてみたい。日記の記述から、二つの疑問が生じる。まず、なぜ帰国直後の三十二年の展覧会ではなく、三十三年に出品したのか。これについては、前述の水彩画会に出すために明治美術会展には出し控えたと考えるのが妥当だろう。三十二年の六月には、明治美術会の陳列館に、「濠洲にて画きし」水彩画八点を持ち込んでいる。そして三十三年の明治美術会展に、いよいよ多数のオーストラリア風景を出品することとなった。

次に問題になるのは、現存作品の制作年である。三十三年の日記に記された「書き直し」の作品には、現在当館で所蔵するオーストラリアの風景画と一致するものが多数ある。「シドニーの図」（二点現存）、「メルボルンの図」（二点現存）、「ブリスバン河の図」（二点現存）、「サンドゲートの図」（図3）、「ケープモルトンの絵」（図4）、「赤道直下の図」、そして「軍艦上甲板の図」の計十点である。そのほか、金剛での航海をアルバム風にまとめた一冊のスケッチブック

が存在する。ちなみに当館所蔵作品以外のオーストラリアの風景画は、現在のところ確認されていない。では、はたしてこれらの制作年はいつなのだろうか。

帰国直後、すなわち明治三十一年十月に箱根で描いた作品については、その一々の内容も、点数も記録されていない。三十一年の「学事」欄には、「水彩画にて人物及風景を描きしもの約三十七枚他に濠洲航海中のスケッチ百枚程あり」とある。「水彩画」と「スケッチ」を別物だと考えた場合、「約三十七枚」の水彩画の中に、現存するオーストラリア風景が全て含まれるのかどうか、疑わしくなってくる。箱根ではオーストラリア風景以外の作品も描いている上、移動が多く、多数の作品を仕上げられたとは考えにくい。一連のオーストラリア風景の制作年は「1898」という年記から、明治三十一年の作と考えてきた。ところが大下が他人の絵を写したのを見てもみると、模写をした年ではなく、オリジナルに記された年号を記入している例が確認されるのである。

例えば、大下の《ニューヘヴン》(図5)は、三宅克己の《ニューヘヴンの秋》(図6)の模写だという指摘が土居次義氏によってなされているが(土居次義「大下藤次郎と三宅克己」『美術工藝』554号)、三十二年九月六日の日記に「ニューヘヴンの図を写す」という記述がある。現存の《ニューヘヴン》が、日記に記された「ニューヘヴンの図」そのものだと断定はできないが、作品に記された「1897」は三宅がニューヘヴンのイェール大学にいた年であって、大下が模写をした年ではあり得ない。大下は、模写をした年ではなく、オリジナル作品にあった年記をそのまま写したのだ。他人

の作品の模写と自作の再制作とを全く同じように考えることはできないが、大下が一連のオーストラリアの風景画に、二年後の描き直しであっても原画を制作した年である「1898」を書き入れた可能性は考えられる。

「吾家の消息」明治三十三年二月十六日の項には、明治美術会に「例の濠洲の絵を修正或は画き直して」出品するという記述があり、この時の出品作品は既に描いていたものに加筆、あるいは同じ図様で再制作したものだったことが分かる。

以上のことを総合すると、当館蔵のオーストラリア風景の制作年について、検討の余地が出てくる。しかし三十三年の再制作であることを示す資料もないため、今のところ明治三十一年の作としており、制作年の確定については今後の課題としたい。

さて、明治三十三年にも、大下は新たな友人を多数得た。この年の日記には民族学者の松岡(柳田)国男、文学者の田山花袋など、多彩な顔ぶれの中に、気象学者、岡田武松の名前も見える。一月二十七日の項に「中央気象台に岡田氏を訪ひて不逢」、二月十六日の項に「中央気象台に岡田氏を訪ひ雲の説をきく」とある。

大下の遺作中に「明治三十二年九月十三日正午南」、「九月下旬西方午后五時」、「三十三年十一月二十一日朝東」、「三十三年十二月五日西南夕」(図7)と記された、空のみを描いた作品がある。その日その時の空、雲を観察し、描いたものなのだろう。明治三十二年から三十三年にかけて、大下が雲や気象についての興味を深めていたことが、作品と行動記録の両面から確認できる。大下は金剛での航海に先がけた明治三十一年一月十九日、「日本風景論」の著者、

評論家で地理学者の志賀重昂にも面会している。このように大下が地理学や気象学に関心を示したのは、美的な感覚だけでなく自然科学の知識をもって、合理的に風景を観察しようという意識を持っていたからだろう。

この姿勢は三十四年六月二十四日に発行された、大下の初めての著書『水彩画の栞』にもあらわれている。『水彩画の栞』は、アマチュアに向けて水彩画の描き方を解説した技法書で、巻頭には森嶋外による「題言」が掲載されている。日記の三十三年十二月二十一日の項に「水彩画の栞を作らなため図書館へゆく」とあることから、大下が発行前年の暮れからこの本の準備を始めていたことが分かる。同書では「雲」「山」「草」など、モチーフに応じた着色法が丁寧に説かれている。特に「雲」の項では、巻雲、巻層雲、積巻雲など、詳細な分類と解説がなされており、岡田から得た知識がここに発揮されている。

なお、この年十二月十四日の項にある「竹下のために写せしパウエル氏の海図」は、『水彩画の栞』の口絵として使われた、イギリスの水彩画家パウエル (Sir Francis Powell 1833-1914) の「大西洋の波」を指すと考えられる(図8)。原画は三宅克己がロンドンのサウスケンジントン美術館で出会った作品だった。三宅による「Powell氏の水彩に就て」(『みづゑ』第7号)と題した文中に「大下君の所謂『御馴染のポーエル氏の海の図』という表現があることから、大下がかなりこの絵を気に入っていたことが分かる。これより前の明治三十二年三月十六日に「三宅氏の写せし海の図模写す」という記述があるので、大下は三宅が模写した絵をさらに模写し、

それを著書の口絵に使ったり、再度模写をして友人に渡したりしていた、ということになる。

このように、大下には他人の作品の模写や、自分自身の作品の再制作が極めて多い。それは自己研鑽のためであり、記録のためであり、収入を得るためであり、また出版のためであった。大下が後に創刊した水彩画専門雑誌『みづゑ』にも、石版で刷られたイギリスの水彩画家の作品が口絵としてしばしば掲載されており、その原画とおぼしきハガキ大の水彩画が、複数確認されている。ちなみにパウエル「大西洋の波」は、先述した三宅の文章が掲載された『みづゑ』第7号にも掲載された。掲載誌には作者名と作品名のみが記されているが、これら口絵は大下による模写をさらに石版画にしたもので、オリジナル作品とは違っていたはずだ。しかし読者には、イギリスの水彩画家が描いた絵として認知されたことだろう。

模写、複製の問題は、出版を通じた水彩画の普及活動を行い、また文章、画像を問わず記録すること、編集することに執着のあった大下にとって重要な事柄だが、これについての検証は別の機会にしたい。

なお、当館所蔵の大下藤次郎作品ならびに資料については、『大下藤次郎の水彩画 島根県立石見美術館所蔵大下藤次郎作品集』(平成二十年、美術出版社)に全点を収録したので、そちらを参照されたい。

〔付〕メルボルンの大下藤次郎

筆者は最近、大下藤次郎が「金剛」での遠洋航海で立ち寄った、

オーストラリアのメルボルンを訪れる機会を得た。ここで、日記や所蔵作品に関するトピックを簡単に紹介したい。

現存する大下藤治郎作品の水彩作品のうち、メルボルンを描いたものは《メルボルン港》と《ロイヤルパーク》の2点。スケッチブックにはその他に「ヤラ河口」「ガバメントハウス」「プリンセスブリッジ」の3点の水彩画がある。

百十年が経過した今では街の様子もすっかり変わっているが、メルボルン港 (PORT MELBOURNE) と、ロイヤルパーク (ROYAL PARK) にゆき、現地の様子を確認してきた。

(写真1)は、ポート・メルボルンの様子。大下は艦上より港を望み、街を広く見渡す構図の絵を描いた。栈橋が海に突き出し、船が停泊している様子は今も変わらないが、陸上の光景は、わずかに煉瓦造りの建物や石炭の貯蔵庫として使われていた倉庫が残っているだけで、近代的な街並みに生まれ変わっている。

(写真2)は、メルボルンの市街地 (シティ) の北西にある、ロイヤルパークの様子。広大な公園で、大下も訪れた動物園もこの中にある。広い草地にまばらに木が生えている様子は大下の描いた光景と同じだが、丘から見下ろすシティの建物は全く違うものになっている。

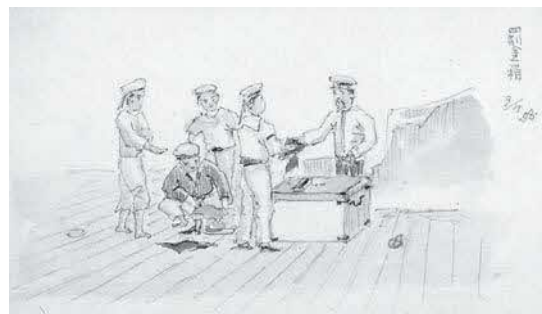
大下は、明治三十一年の日記の「思想」欄に、「外国の市に到るや物質的の進歩に驚くと共に更に幾多の感想を生ぜり外人の家庭に入つては其美に感じ美術館を見ては其精巧に驚き」と記している。日本にはない広々とした公園や、ヴィクトリア様式の巨大な建築物に目を見張った様子が想像できる。

また、明治三十一年六月十五日にシドニーで面会し、絵を交換したという「トム・ロバート氏」(TOM ROBERTS 1856-1931)は、イギリスに産まれ、一八六九年にオーストラリアに渡った画家。風景画や風俗画を、メルボルンのナショナルギャラリーで見ることが出来る。大下が交換したという絵がどんなものであったか、非常に興味深い。今のところ不明である。大下がオーストラリアで見た現地の絵画がどのようなものだったのか、またその影響の有無についての検討は、今後の課題としたい。

(当館主任学芸員)



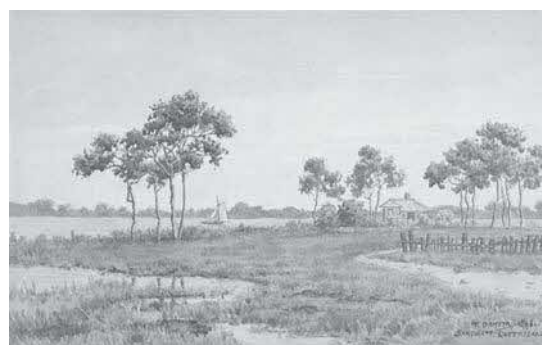
(図2)
大下藤次郎《軍艦金剛にて 雨浴》
明治31年 当館蔵



(図1)
大下藤次郎《軍艦金剛にて 罰金箱》
明治31年 当館蔵



(図4)
大下藤次郎《モートン岬、クイーンズランド》
明治31年 当館蔵



(図3)
大下藤次郎《サンドゲート、クイーンズランド》
明治31年 当館蔵



(図6)
三宅克己《ニューヘヴンの秋》
『日本美術工芸』554より転載



(図5)
大下藤次郎 (模写) 《ニューヘヴン》
明治32年頃 当館蔵



(図8)
大下藤次郎 (模写) 《大西洋の波》(原画：Sir Francis Powel)
明治32年頃 当館蔵



(図7)
大下藤次郎 《雲の観察》
明治33年 当館蔵



(図10)
大下藤次郎 《ロイヤルパーク・メルボルン》
明治31年 当館蔵



(図9)
大下藤次郎 《メルボルン港》
明治31年 当館蔵



(写真2)
現在のロイヤルパーク



(写真1)
現在のポート・メルボルン